

小説版バンドリのヤンデレの様なそうでないような話集

現実逃避中

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現実逃避のために書きました、現実逃避すると書きますので不定期です

性質上、キャラが変わっていますので読む際は注意

3 / 17 追記

アンケートありがとうございます。

続きを書いてみようと思います。

目次

戸山香澄	1
市ヶ谷有咲	9
牛込りみ	16
花園たえ	24
山吹沙綾	32
戸山香澄・続	43
市ヶ谷有咲・続	52
牛込りみ・続	61
花園たえ・続	70
山吹沙綾・続	79

戸山香澄

どうしたの？ と学校からの帰り道にあなたは自身の幼馴染に声をかけた。

ちよつと変わった髪型をしている、あなたの幼馴染——戸山香澄——はいつも暗い表情をさらに暗くさせてあなたの裾を掴んで俯いていた。

「……笑われたの」

何に？ と聞き返すと「……スタ子」と一言呟いて香澄は俯いた。

スタ子？ と首をかしげるあなたに対し、泣きそうな声で香澄はぼつり、ぼつりと呟いた。

——授業中にぼうつとしているところを先生に指名されてしまったこと

——慌てて教科書を読んだら別のところを読んでしまったこと

——その時に「恋はスタンプカード」と言ってしまったため、スタ子と笑われたこと

呟いていたらその時のことを思い出してしまったためか、香澄の瞳からは涙がポロリと零れ落ちていた。あなたは慌てて香澄に自分のハンカチを渡した。

香澄はハンカチを受け取るとそつと自分の涙を拭った。その顔に少しだけ笑みが戻ったことにあなたは安堵した。

「……ありがとう、優しいね。やっぱり、私にはあなただけいければもう何もいらぬよ……えへへ……」

小さく微笑みながら香澄は言った、裾を握る手に少し力が入っていた。その瞳は暗い輝きを放っていた。

あなたはそんな香澄を肯定も否定も出来なかった。ただ、香澄に気づかれないように心の中で溜息をついた。

あなたの幼馴染の戸山香澄は昔は活発な女の子だった。

家族合同で星見の丘にキャンプに行ったとき、満天の星空と一緒に

見上げていた。香澄は優しい星の光を全身に浴び、輝く満天の星空を見て星に負けないように目を輝かせ、その場で何度も何度もぐるぐる回り、とびつきりの笑顔ででたらめな星の歌を輝かんとばかりに歌っていた。彼女はその事について「星の鼓動が聞こえたんだよ！」と興奮で眼を輝かせながら語ってくれた。あなたがわからない「何か」を彼女は感じ取ったらしい。

あなたはそんな香澄に目を奪われた。満天の星空で一人の少女が歌を歌い、踊るように回っているその光景は、まるで香澄が星空と一つになったかのような幻想的な絵画を見ているかのようなようだった。脳に深く焼き付けられたその光景はあなたの中でとても大切なものだった。同時に、あなたは星の鼓動がわからなかったことが寂しさも日もつけられてしまった。

小学四年生、その学年だけいつも同じクラスだった香澄とあなたは別のクラスになった。あなたも香澄も残念だったが、家も近くていつでも会えるし遊べるのでその時はそこまで気にしていなかった。

その夏休み、あなたは香澄と毎日のように一緒に変わらで歌っていた。童謡に唱歌、人気アイドルの歌やアニソン、自作の山の歌、星の歌、川の歌、ある日はハンバーグの偉大さをたたえて、ある日はお互いの家族について、ある日は近所の犬について……「いつも頭の上に星空が広がっている」あの時の香澄は笑うようにそう言っていた。そんな香澄に近づきたくてあなたは香澄といつも一緒だった。

ある時、香澄のクラスの男子達が河原にやってきた。香澄は驚いた様子だったが、男子達は歌に喜んでいて。あなたはちよつとだけ邪魔されたかのような気分になったが、歌を聞いて喜んでくれるのはいいことだ、と香澄と同じように元気よく歌い続けた。

夏休みが明ける頃、あなたは虫垂炎で体調を崩し病院行ったり来たりで忙しかった。そのせいで……香澄が大変になっていることに気

が付かなかった。今でもその時の自分を殴ってやりたい気持ちになる。もつともそんなことをしても香澄は悲しむだけだろうが。

香澄は夏休み明けから、男子達——夏休みに河原で歌を聞いていた連中——に歌のことをからかわれていたらしい、真似して歌われたり、ミュージカルみたいにされたり、あなたが虫垂炎で香澄のそばを離れていたことを、フラれた——とかも言われていたらしい。

そしてある日、香澄のクラスで学級裁判が行われた。あなたがそのことに気が付いたのはすべてが終わってからだ。香澄が保健室に運ばれたと耳に挟んだあなたは、慌てて保健室へ行った。そこには涙を流してなく香澄がいた。その時のことをあなたはあまり覚えてはいない。ただ、あの太陽の様に明るく、星の様に輝いている香澄があんな風に泣いているのを見るのはあなたにとってはとてつもない衝撃だった。

あなたは抱き着いて涙を流してあなたの服を濡らす香澄を、ただただ黙って撫で続けることしか出来なかった。あなたの頭は衝撃と怒りと悲しみでごちゃごちゃしていた。一瞬、香澄のクラスメイトを殴りに行こうかとも考えたが、それを否定するかのように香澄は強くあなたを抱きしめた。そんな香澄をあなたは抱き返し、静かに涙を流した。

「……何も言わないでくれるんだね、ありがとう」

香澄はそうつぶやいて泣きながら笑った。その眼が濁っていることにあなたは気が付かなかった。

それからというものの、香澄はあなたにべつたりになつてしまった。登校する時も、休み時間の時も、帰宅の際も、休日もいつもあなたの裾を掴んで影に隠れるかのようにしていた。最初はそんな状態を香澄のクラスメイトの男子にからかわれていたのだが……ある日こちらを見た時に悲鳴を上げて逃げ去ることがあり、それ以降からかうことも無くかった。

常に一緒にいるのも流石にまずいと思ったあなたは、高校は別の所へ進学しようと香澄に話を持ち掛けた。その時の香澄の表情はあなたの想像を越えており、

「……わ、私のこといらなくなっちゃったの？」

「……ごめんなさい、ごめんなさい！悪いことしてしまったのなら謝るから捨てないで！」

「お、お願いします。あなたのそばにいさせて……」

そんなありさまだった。

結局、香澄になき落とされたあなたは登下校は一緒にすることをお約束し、香澄は花咲川高校へ、あなたは花咲川高校近くの高校へ進学することになったのだ。その時、香澄は何故か嗤っていたが……あなたはその香澄の表情を無視した。

香澄といつも一緒なので同じクラスメイトに、「彼女」とからかわれているが、悪いことにそう言われることに悪く感じなかった。

「……そう言えば、ね。あなたは気が付かなかったみたいだけど、通学路に星のシールが貼ってあるの」

何それ？ とあなたが聞き返すと香澄は脇にあつた側溝のブロックを指さした。あなたがそちらの方を見るとそこには確かにきらきらしたマスキングテープに銀色のマーカーで『☆↓』と描いてあった。行かないの？ とあなたは香澄に尋ねたが、香澄は笑って首を振った。

「……あなたがいれば、私はそれで……」

それに、と香澄はあの時の様に嗤った。

「……あなただっけ行ってほしくないでしょ？」

あなたはその言葉に首を縦にも横にも振ることが出来なかった。

香澄に以前の様に輝いてほしいという思いは確かにあなたにあつた。あの時の輝いていた香澄になって欲しい、絵画の様な幻想的な光景をまた見たい、とあなたは思っている。しかし同時に、香澄があなたを残して絵画の向こうへ行ってしまった様に感じてしまうのだ。だから、よくないことに、今現在の関係で満足してしまっているあな

たがいた。

あなたは何も言わず、香澄の手を取った。そして、矢印の方向へ行かないようにと足早に歩きだした。香澄は驚いたように目を丸くしたが、頬を染めてあなたに微笑みかけた。

あの学級裁判の時、男の子たちは私を揶揄った。女の子たちは私をかばった。先生は中立で審判をしていた。男の子も、女の子も、先生も傍にはいてくれずに学級裁判をしていた。別のクラスの彼だけが……終わった後、ただ傍にいてくれた。何も言わずにただ傍にいてくれることが嬉しかった。同時に、学級裁判にいなかったことに少しだけ恨んじやった。

私自身にも彼に対する感情がわからないことがある、特別な人だとは思っているけど……

傍にいてくれたことに感謝をしているし、いてくれなかった事を恨んでいる。だから、私は彼の傍を離れたくない／離したくない。彼だつてきつとそう思ってる。別の高校に進学しようと話に来た彼の表情はとても傷ついていたから……そのことを嬉しく思うし、申し訳なく思うし、当然だと思う。

私にはあなただけいれば、それでいい。

それに、保健室で抱き着いたときに感じたことがあるんだ――

あの後、逃げるように帰って来たが、あなたは香澄に誘われて香澄の部屋へ一緒に向かった。

おばさんが、「いつも香澄のことをありがとうね」と声をかけてくれる。その言葉にあなたは、どうも……とだけしか答えられなかった。失礼に思われただろうか、そんなことをあなたは脳の上辺だけで考えた。

香澄の部屋はおおよそ年頃の女の子とは思えない地味な部屋だつ

た。ピンクだのカラフルだのは無い。言うならばグレーの部屋だった。

ダンスにキャンプの時の写真が飾られていた。懐かしく、美しいと思うはずのその写真をあなたは直視できなかった。

「……実はね、と、友達が出来たんだ」

その言葉に驚いたあなたは香澄の方を見た。笑顔で話す香澄を見て、胸の中で寂寥感が少しうずいたが、同時に香澄に友達が出来たことを喜んだ。

香澄の友達などいついらいだろう？ あの学級裁判の後、お互いに友達を減らしてしまった。その香澄が高校で友達を作ったというのだ。自分の判断は間違いではなかった、そう思いながらもモヤモヤする自分に少々苛立つ。

どんな子？ あつてみたいいな、とあなたが言うと。香澄はビシツ！

と効果音が出るくらいに笑顔を固まらせて、あー、うー……と唸りだした。おや？ とあなたは首をかしげた。

「わ、わからないの……」

なにが？ 友達の予定？

「ど、どんな子かわからないの？」

??? とあなたはさらに首をかしげた。イメージナリーフレンドか何かだろうか？

「え、えつとね……机でやり取りしてるだけだから……どんな子かわからないの……」

聞けば、香澄の机に文字を書いてやり取りしているとの事だった。どうやら相手は定時制の生徒のようだ。いつからやりとりしているの？ と尋ねると「にゅ、入学式から……」という返事。顔もわからない相手のことを友達という香澄をあなたは心配し……同時にその程度の付き合いであることに安心してしまった。

あなたは自身の思いを弾き飛ばすように首を振った。キャンプの写真を見てしまっただろうか、一番気になってることを香澄に尋ねた。

星の鼓動はどうするの？

香澄はその質問に顔を俯かせるわけでもなく、嗤うわけでもなく、頬を染めた。

「……あるよ、私だけの星の鼓動」

香澄はそう言うとおなたにしだれかかってきた。え？ え？ とあなたは困惑した。あなたの身体が彼女の柔らかさを感じ、あなたの鼻は彼女の匂いを感じた。心臓がドクドクと音を立て始めた。

「……ほら、いまもドキドキしてる」

香澄はあなたの心臓の音に耳を澄ませていた。あなたはその言葉を聞いて、何も言えずにただ抱きしめた。

あなたにはその心臓の音は星の鼓動には聞こえなかった。また、彼女だけが星の鼓動を感じている……抱きしめているはずの彼女がとても遠くの存在に感じた。

自分なんかのことをそう言ってくれるのは本当に嬉しい。しかし……置いていかれてしまった気がして寂しくも感じる。

「……あなたもわかるよ」

え？ とあなたは香澄に返した。

香澄はあなたから離れると、あなたの手を取ってその手を自分の胸へと導いた。

あなたは顔の熱が急に熱くなるのを感じた。香澄を見るとその頬をさつきまでの比ではないぐらいに赤くさせていた。

あなたはあなたの手を通して香澄の心臓がドクドクドキドキしているのを感じた……ああ、そっか、あなたは何となく理解した気になった。

「……ね？ あなただけの星の鼓動だよ」

顔を真っ赤にさせて微笑む香澄の顔は、奇しくもあなたが見たかった様な顔をしていた。

星の鼓動

私だけの星の鼓動

どうか消えないで、そのためならなんだってするから

あなたも私に星の鼓動を感じて……

市ヶ谷有咲

「減点ねー」

え？と突然の宣言にあなたは戸惑うしかなかった。同伴者で幼馴染の戸山香澄も困惑した様子でオロオロしているのが見えた。

今日はここ——質屋の蔵でギターの練習を香澄がするというので付き添いで一緒に来たのだが、その蔵の王で数日前に知り合ったばかりの少女、市ヶ谷有咲に開口一番に減点の一言を浴びせられてしまった。

しかし、何が減点なのだろうか？あなたが首をかしげるとその様子にイラツとしたのか有咲の目つきが鋭くなり、これみよがしに溜息をついた。

「まず服装……ダサイ。しかも、女の子と一緒にその服装はさらに減点」

「髪型も同じ、もうちよつと整えなさい」

「あと顔つき、もうちよつとシャキツとした表情を見せなさい」

「それとあんた、かすみんのオマケでしょ？かすみんなメインなんだからジュースとかお菓子とかぐらい買ってあげなさいよ」

次々とダメ出しされてしまった。そんなに変な服装も髪型もしてないしとあなたは思っていたが、有咲視点ではダメダメの様だ。

だが確かに香澄はこれからギターの練習をするのだから労いの為にスポドリの一本くらい買ってあげても良かったかもしれない、あなたは有咲のダメ出しに納得してしまう。

「あ、有咲ちゃん、その辺にしてあげて……それに結構おしやれしてると思うよ」

ちよつとへこんでいることを察してくれたのか、香澄が有咲を止めに入ってくれた。流石幼馴染、ありがたいことである。

しかし続けて「普段の服装はもうちよつと……」はフォローしているのかしていないのか……とあなたはちよつと悩んでしまった。

「かすみんに庇われてる、減点ね」

せつかくの香澄のフォローも減点になってしまった。言いたいことがあるなら自分で言え、ということだろうか？しかも有咲は取り出したメモ帳に何らかのチェックをしている。

もしやあれでチェックされているのだろうか？そう思うとあなたは寒気に襲われた。

……ここで有咲と問答しても香澄の練習が出来ない、仕方ないからさっさと入ろう。そんな風に考えたあなたは有咲に一言声をかけて、香澄と一緒に蔵の中に入った。その後ろから、ペンが丸を描いたような音がしたのは無視した。

「零点ボーイ！あんた、ゲームをするって言ってたわね。どんなゲームをしているの？」

香澄のギターの訓練の休憩中に唐突に有咲があなたに尋ねてきた。ついでに自分が零点らしいことに気づいたあなたはがっくりと肩を落とした。

有咲はゲーム好きで、蔵の中にはレトロなゲーム機から有名なゲームソフトまで様々な種類のゲームが置いてあった。あった、というのは過去形で持っていたゲームを自身の祖母が商いしている質屋に出してしまったからである。それでも、ゲーム好きなのは変わらないから話を振ってきたのだろうとあなたは考えた。

あなたは有咲に自己紹介したときにゲームが好きと言った事を思い出した。そして、あの時に有咲が少し目を輝かせていたことも思い

出した。ゲームの話が出来る人がいなかったのだろうか、香澄はあまりゲームをやらないし……とあなたは考えた。香澄とは仲がいいが、やはりプレイしているゲームの話が出来ないのにちよつと寂しさを感じていたあなたは、喜々として自分の好きなゲームのタイトルについて有咲に話した。

あなたが好きなのは主に有名なゲームタイトルだった。有咲もそう言うの持っていたから話が合うかな、と考えていたあなただったが、有咲の顔は見る見るうちに呆れたような苛立ったような顔になった。

「竜の探索、最終幻想、炎の紋章、ね……零点ボーイ、あんたいわゆるギヤルゲーとかしないの?」

え、とあなたは固まった。ギヤルゲーとか恋愛ゲームとかしたことが無い。理由は単純、プレイするのが恥ずかしいからである。

あなたが固まったことで有咲は察したのか、「はあ……」とこれ見よがしに溜息をついた。

「いい? 零点ボーイ。ギヤルゲーとか恋愛ゲームとか女の子のこといちやいやするだけだと思つて恥ずかしかつてると思ふけど、あれらの中には意外に感動したり心を揺さぶられるような作品があったりするのよ?」

そういうものなのか、とあなたは有咲に返した。様々なジャンルのゲームを遊んでいる有咲はいわゆるガチゲーマーというやつだろう。それに比べると自分にはわかゲーマーである。

「仕方ないわね……」と、またこれ見よがしに溜息をついた有咲は蔵の中を回り、隠してあったいくつかのゲームを集めてきた。

「はい、貸してあげる」

と、集めて来たゲームソフトをあなたに差し出した。
え？と思いつつあなたが有咲の差し出したゲームソフトを見ると、恋愛ゲームやギャルゲー、はたまたプレイしたことのないレトロなゲームソフトもあった。

「とっておいたあたしのお気に入りを貸してあげるのよ、プレイしてみなさい。きつと私に感謝したくなるわ。……それも後で売るから、ちゃんと返しなさいよ」

ぐいぐいと有咲はゲームソフトを押し付けてきた。有咲がそこまでするのなら仕方ない、とあなたは有咲からゲームソフトを受け取った。恥ずかしながらプレイしたことが無いとはいえ、あなたも年頃である。興味自体はあったので遊ぶきっかけとなるのはちよつとありがたかった。……有咲には素直に言うことが出来ないが。

その様子を見た、有咲はフン！と得意げに鼻を鳴らした。
しかし、あれだけあったゲームを売ってしまい、このゲームもワザワザ隠してあったということは、普段有咲は何をしているのだろうか？とその事を尋ねたあなたは尋ねてみた。

溜息と「……覚えてないのかしら、減点ね」と言葉が返って来た。もはやマイナスボーイではないだろうかとあなたはぼんやりと思った。

「いい？いまあたしがやっているゲームは『Bang Dream！』
星に導かれた主人公かすみんのピュアでシャイで、バカでクレバーで、熱くてクール、最高にしてサイテーの物語よ！」

「……なのに、零点ボーイがそばにいますと主人公がかすんじやうわ
かすみんだけにね！と続ける有咲だったが、あなたは苦笑いするしかできなかつた。その反応にイラついたのか、フン！と鼻を鳴らす有咲。

「だから、あたしがあんたを採点してるのよ。いい？ヒロインに合わせる100点満点ボーイになりなさい。そのゲームはそのための第一歩よ。『Bang Dream！』風に言うなら、それがあんたの

ミッションよ、頑張って100点を取れる男になりなさい」

ああ、なるほど自分のことも考えてくれているのか、とあなたは感心してしまった。……点数を付けられるのはちよつと怖いが自分の為にくれてくれていることを無下にするのは、あなたにはできそうになかった。

色々ありがとう、プレイしてみるよ。と、あなたは有咲にお礼を述べた。ゲームの有咲がお気に入りというぐらゐの作品だから楽しめそうだ、とあなたはちよつとウキウキしていた。

「あ、そうそう。貸出料じゃないけどゲームのプレイレポート書いてあたしに提出しなさい。で、それも採点するから。日にちは……そうね、かすみんの練習と被らないようにしたいから〇月〇日ね、ちゃんと期日を守って一人で来ること！」

ええ……とあなたはがつくりした。レポートがあるなんて聞いてない！なんで、ゲームをしてレポート書いて採点されないといけないのか……

朝のやりとりもあつたせいが一連の話をはらはらしながら聞いていた香澄は肩を落とすあなたを見て苦笑いしていた。

「……減点、減点ね」

香澄たちが帰つた後、有咲は蔵の中で一人メモ帳を整理していた。「零点ボーイ用」と書かれたメモ帳にはその日の『彼』の行動が逐一チェックしてある。蔵に来た時に採点したものに飽き足らず、何時何分にお茶を飲んだとか、香澄と何分何秒話していたとか、何時何分にトイレにどの時間いたのかとか、有咲と話した時間とか……様々なことが記されていた。

「……ダメね、ダメダメ。何が一番ダメかとかすみんと一緒にいるのが一番ダメ。あれだけでも零点。むしろマイナスかしら？とにかくダメね、ダメ」

「乙女心がわかってない」

憤怒の炎を目に宿し、苛立ちを隠さない声色で有咲は呪詛の様に言葉をつき出した。

香澄が『彼』を連れて蔵に来たとき、蔵の中で香澄のテキトーなギターに合わせて一緒に『彼』とくるくる回った時、その時に運動不足で疲れている自分を『彼』が気遣ってくれた時、有咲は心を撃ち抜かれていた。

まさか自分が……一目ぼれのような思いを抱くことがあるとは思っていなかった。ゲームの中だけだと思っていた出来事が現実になり、心臓が爆発しそうなくらいドキドキしたのを覚えている。香澄に心を撃ち抜かれたと同時に彼にも撃ち抜かれていたのだ。

……しかし、その後も彼は香澄のことばかり気にしていた。香澄は有咲の主人公であったが有咲はその主人公に激しく嫉妬した。こんな激情を抱くのは初めてだった。しかし、香澄は有咲にとって主人公である。どうすればいいのか……有咲は悩んだ。

悩んで悩んで……その果てにとあるゲームを思い出し、名案だとばかりに囁い声を上げながら答えを出した。

「そうだ……あいつをあたしが育てれば……！」

「主人公はあたし、あいつは育成対象！」

「あいつをあたしに合う……あたしにとっての100点の『彼』にすればいいのよー」

『ゲームのタイトルは『ZEROM@STER』。零点ボーイの『彼』があたしをヒロインにするためにあたしが『彼』の面倒を見てあげる育成ゲーム。カッコ悪くてカッコ良くて、抜けてるけど察しがよくて、冷静で情熱的、最低にしてサイコーの物語！……考えただけで素敵だ

わ……！」

『Bang Dream!』に男キャラはいらない！可能性があるだけでアウトなのよ！主人公のかすみんのためでもある、まさに一石二鳥ね」

……それから有咲の『ゲーム』が新たに始まった。厳しく『彼』を採点しながら、趣向や思考が有咲にとって満足するものになるように誘導している……が、これがまた手ごわい。なんせ お邪魔キャラの出現率が非常に高いのだ。そのためイライラしてつい『彼』に対して厳しく当たってしまう。『彼』がお邪魔キャラと話をしていると、頭が沸騰しそうになり視界が暗くなっていくのを有咲は感じている。

「かすみんてば全く……まあ、いいわ。レポート、あたしの感想や考察と違っていたら指導してあげなくちゃ。……ふふ、大変ね。でも、あいつが1000点を取るためだと思うと……しっっかり面倒を見てあげなきやね……」

約束の日が楽しみで楽しみでしようがないという風に濁った瞳で有咲はくすくすと暗く笑った。その脳内には自分と『彼』しか存在していなかった。

牛込りみ

ジリリリリリリ!

7時ぴつたりにけたたましく鳴響く目覚まし時計の音に反応しあなたはベッド横にあるサイドチェストへ手を伸ばした。

何度か空振りながらも、目覚まし時計の鳴響く音をスイッチを押して止めた。

そこから数分して起き上がったあなただったが、どうにも身体が怠い。

あなたは自身の体調に首をかしげた。今日は土曜日で学校こそないものの、朝早めの時間から市ヶ谷家の蔵での練習があり、あなたもサポートで参加するはずだったので早めに寝たのに、なぜ身体が怠いのだろうか？

日頃の疲れかな、と短絡的に思考を打ち切ったあなたは、今度は鳴響く腹の音を止めるために朝食を取ることにした。

「……よし、取りあえずお昼にしましょう」

市ヶ谷家の蔵、そこで蔵の主である市ヶ谷有咲は12時を指す時計を見て休憩時間を告げた。

「……た、楽しかったけど、飛ばし過ぎたね」

「師匠、うちはもつとガンガンやりたいぞ!」

ギター&ボーカルの戸山香澄がタオルで汗をぬぐい、ベースの牛込りみが頬を膨らませて裸足で飛び跳ねる。

休まないと持たないよ、とあなたはりみに声を掛けつつ、スポーツドリンクを渡した。次いで香澄や有咲にも渡していく。「気が利くようになったわね、私の指導の賜物ね」と呟きつつうんうんと満足そう

に首を振る有咲を見て、あなたは苦笑した。

それからあなたたちはそれぞれの昼食を取り出した、最近はずまっているというカツ丼にお湯を注ぐ有咲、女子高生らしいお弁当箱に色とりどりの惣菜が入っている香澄、白米だけというある意味個性的なりみ、何故か大小の2つの弁当箱もっているあなた。

どうぞ、といいながらあなたは持っていた小さい方の弁当箱をりみに渡した。

「主殿！ いつもいつもかたじけない！」

りみは弁当箱を受け取ると土下座しそうな勢いであなたに頭を下げた。そんな姿を見てあなたは苦笑する。

りみとの出会いは衝撃的だった。蔵で香澄の久しぶりの歌を聞いていたら、突然乱入し、ベースをかき鳴らしたと思ったら、逃げていった、というものだった。顔見知りだった香澄はともかく、有咲と二人で唾然としていたのは懐かしい。

その日の夕方、蔵でのことで縁が出来てしまったのか、あなたが買い出しから帰ると、お腹を大きく鳴らしたりりみとぼったり家の前でお会い、先ほどはどうも、とあいさつした後になりみの食事情を聞き、夕飯を作ってあげることになった。

聞けばベースを買ってしまったせいでかなりの貧乏暮らしをしているようで、高校で白米を売っているらしい。よくわからなかったが、これが意外にも運動部から人気の様でそれで頑張っていたのと。

あなたも親が海外へ出張しており、一人暮らしをしていた。幸いお金は結構な額を毎月親が振り込んでくれるので心配が無かったことと、同じ一人暮らしということにシンパシーを感じたあなたは、よかったですら昼食の分のおかずを作ろうか？ とりみに提案してみた。

武士は食わねど高楊枝、という言葉がある。彼女が武士だったら施しなど受けない、と突っぱねただろう。しかし、彼女はニンジャだ、感激と共に片膝をついて頭を下げ「主殿！ 一生お仕えする！」と即行で話を受けた。以来、あなたはりみから「主殿」と呼ばれている。

それからというもの、りみとの交流が始まり、お弁当を渡したり、落

とってしまった鍵を届けてくれたり、お菓子を作ってあげたり、白米を分けてもらったりなど、持ちつ持たれつの関係になっていた。

「師匠！ 師匠に教えてもらいたいことがあるのだが」

皆で昼食を取っている最中、あなたの作ったハンバーグに舌鼓を打っていたりみが唐突に香澄に声をかけて来た。

まあ、りみの突然の行動は今に始まったことではないので、皆あまり気に留めてはいなかったが

「え、なにかな？ 私でよければ……」

「色仕掛けのやり方をうちに教えてほしい」

ぶっ！ とその場にいたりみ以外の全員が噴出した。カップ麺のスープを飲んでいた有咲は咽こんでしまったらしく、涙目になりながら、ごほつごほつとせき込んでいる。その背をあなたはゆつくりと優しく摩った。

食事中に突然何を言い出しているんだこのニンジャガールは、と考えながらあなたにしては珍しく、半眼でりみの方を見ていた。

りみと眼があった、ウインクされた。違う、そうじゃない。

「あ、あんたねえ、突然何を言い出してんのよ……」

「うむ、ベンケー殿、師匠は色仕掛けの達人だからな、そのコツを伝授してもらおうと思っただけだ」

「はあ？ かすみんが……？」

あなたと有咲の視線が香澄に突き刺さる。

いきなり、色仕掛けを教えてほしいと一歩間違えればセクハラ発言を受けた女子高生の香澄はフリーズしていたが、有咲とあなたの視線により再起動した。そして、再起動した直後に顔を真っ赤にして、視線から逃れるようにうつむいてしまったが。

こんな香澄が色仕掛けの達人？ とあなたと有咲は顔を見合わせ

た後、再び真つ赤な頬で俯いている香澄を見た、首を二人そろってかしげるだけだった。あなたと香澄の付き合いは長いが香澄が色仕掛けをしているところなど見たところが無い、あなたや戸山家の家族に隠れてそんな行為をしていたという事実があれば卒倒する自信があるが、香澄の様子を見る限りそんなことは無いだろう。

有咲も同じ思考をしていたのか、顔を赤く染めて俯いた香澄から視線を外し、呆れた目をしてりみの方へと顔を向けた。

「このかすみんのどこが色仕掛けの達人なのよ？ あんまり、変なこと言うんじゃないわよ」

「そんなことはない。ちんちくりんなベンケー殿と違って色仕掛けの達人だ」

「だれがちんちくりんよ、このすつとこどつこい！ そこまで言うんならかすみんが色仕掛けの達人だという証拠があるんでしようね……!?!」

「あ、あの有咲ちゃん、私そんなふしだらなことしてないよ！ あなたも何か言つて」

香澄に涙目で見られたので、あなたも、香澄がそんなことをしていると幼馴染として思うことが出来ないしあんまり言うことを言うのは良くないと思うよ、と少し注意するような感覚でりに告げた。

しかし、その言葉を受けたりみは逆に自信満々と言った表情だった。？とあなたは首をかしげた。

「ほらみるベンケー殿」

「何がよ」

「普段はあまりしゃべらず穏やかな表情でうちを見守る主殿が、師匠に言われて注意までしてきた。これは主殿が師匠の色仕掛けにひっかかったからに違いはない」

「はっ」

何言つてんのこの子、全員がそんな目でりみを見たが、りみはいたって大まじめの様である。

「そういうわけで師匠、色仕掛けのコツをどうか教えてほしい。うち

の独学では限度がある」

「え、あの、そ、そんなものないよ?」

「大体、そんなこと聞いてどうすんのよ」

「うむ、うちはいつも主殿におかずを恵んでもらっているので、恩を返さねばならぬと考えた。しかし、うちの手元にはほとんどお金が無い。この間使ってしまったしな……ごほん、そこでうちは考えた、ニンジャらしく身体で返せばよいと。そのために色仕掛けの達人の師匠にやり方を教わりたいのだ」

「何とち狂ったこと言ってるのよあんたは! 駄目に決まってるでしょ!」 あたしのあいつへの指導を無駄にするつもり!」

「蔵ベンケー殿の主殿に対する指導が何の役に立つのか?」

「はあ?!」

和やかな昼食時間だったにも関わらず、りみと有咲がギャーギャーと騒ぎ出した。香澄はどう止めようかおどおどしている。あなたは遠くを見つめて今日の晩御飯は何に使用かなと現実から目を外した。

練習が終わって家に帰る際になった時にりみが「主殿の護衛はうちの仕事だー!」と叫ぶので、香澄とりみと一緒に家の近くまで帰る事になった。疲れていたが、りみが元気よく香澄に話しているのを見ると、それだけでこちらも楽しい気分になる。たまにはこんな帰り道もいいか、とあなたは思った。

どうしても家の手前までりみが付いてくるというので、先に香澄と別れた後でりみに家まで送ってもらった。流石に手ぶらで返すのはどうかと思ったので、少し前に作っておいたトリユフチョコをりみに渡した。りみはキラキラした瞳でそのチョコを受け取ると、「主殿からの下賜、大事にする」と言って胸元にしまってしまった。

「では、主殿良い夢を。早めに寝るように」

そんなことを言ったりみはスキップするような軽い足取りで家の前から去っていった。中に入るとか言うかな？　と思っていたあなたにとっては少し拍子抜けではあったが、まあそれが普通か、とあまり気には留めなかった。

まあ、朝身体が怠いこともあったし、りみの言うとおりに早めに寝ようか、とぼんやりそんなことを考えていた。

夜

あなたが深い眠りについた後、あなたの家の鍵を開けて入ってくる影があった。

何を隠そう、その人影はりみだった。

その手には本来存在しないはずの合鍵が握られていた。

「主殿を守るのはニンジャの務め、うむうむ」

小さな声で一人しきりに頷くりみ。

あなたはベッドに入ってから眠りにつくまでが早い上に、一度眠りにつくとよほどの事が無い限り起きない。そのことを香澄から聞いていたりみは、あなたが眠りについてからこうして侵入してきているのである。

合鍵はどうやって作ったのだろうか、それは勿論あなたが鍵を落とした時に――　否、蔵での練習中にあなたのカバンからこっそりと拝借していたもので複製し、何食わぬ顔で落ちていたのを拾ったと本物の鍵をあなたに返したというのが真実である。最も合鍵を作るのでさらにお金を使ってしまったが……

「穏やかな表情で眠っている、これもうちが護衛しているからこそ」
寝ているあなたの前で、満足そうにりみは笑った。

1時間、2時間としばらくそんな様子で眠るあなたを見ていたりみだったが、ニンジャを自称しているとはいえ夜も更けてくると流石に眠くなってきたのか、舟を漕ぎ始めた。

はっ、としたりみは軽く自分の頬を張って眠気を覚まそうとする。が、それでも眠気が勝った。

「う、ん……今日の務めはここまでだな」

不甲斐ない、と続けて呟くりみだったが、その頬は朱に染まり、艶めかしく唇を舐め上げる。これからの事が楽しみで仕方がないというように妖しく笑う。

「では、今日の分の給金をいただくとするか」

ちらり、と一度りみは寝ているあなたの下半身を見た。

「昨日は主殿の味が良いすぎて少々やりすぎてしまった」と呟いたりみは蔵に集まった時に怠そうにしていたあなたに心の内で謝罪し、それでもなお惜しむように下半身を見つめていたが、一度頭を振った後に、妖艶に微笑んであなたの手を取って自分の下半身へと引き寄せ――

「主殿、お休みなさい」

色々な後片付けをした後、りみはあなたの押入れの中の空いてるスペースに入ってしまった。

何故押し入れの中に入るのか？ 「うちはニンジャだから」という簡単な答えで返しそうなりみは押し入れの中でそのまま眠りに入ろうとする。

主の家の前で初めて（とりみは思っている）自分の主に会ったときの事をりみは思い出す。

実家の方にはいなかった優しい表情で笑う穏やかな瞳の持ち主。その瞳にりみは惹かれた。自分の身体の事を気遣い作ってくれた料理は暖かく美味しかった。こちらの話を微笑みながら聞いてくれるのが好きだった。

ニンジャを自称するりみは、ニンジャが仕える主なくふらふらししているのどうか、とちよつと考えていたが、まさかその主がこんな簡単に会えることができるとは思っていなかった。主との出会いはま

さしく運命そのものだったのだ。

しかし、やはり主をつけ狙うものは多い。お色
気の術の達人で何かとあれば自分の主を頼りにする魔性の女こと師
匠の戸山香澄。主を注意するような言動で主の思考を縛って自身の
傀儡にしようと企んでいるベンケーの市ヶ谷有咲。

主の優しさに付け込んで利用することしか考えてないあの女ども
には渡せない、渡してなるものか。そう考えるりみの瞳は実の親でさ
せ見たことがないほどに、濁り凍てついていた。

(主殿の事はうちが守る……明日も早いしはよ、寝な……)

なにせ、主が起きるのが7時なのでその前に起きて自分の家に戻ら
ないといけない。

主の傍に控えながら一日が終わる。そのことにりみは幸せを感じ
ながら眠りに落ちていった。

花園たえ

『——やくそく、だよ！ いつか、きつと……』

とある夕暮れの公園。そこには二人の子どもがいた。

一人はショートカットの綺麗な黒髪に動きやすい服装をした野生児を思わせる子で涙を流していた。

もう一人はさしたる特徴のない普通の少年、強いて言うならその瞳は穏やかであるということぐらいか。

綺麗な髪の子が穏やかな瞳のもう一人の子に、涙ぐみながら小指を差し出した。それを受けた穏やかな瞳の子どもは黙ってうなずくと、自身の小指を差し出した。

『ゆびきり、約束だからね！裏切ったら、許さないからね！』

小指が絡み合い、二人は手を緩やかに上下に動かして約束をした。

数秒、そのまま名残を惜しむように二人の小指は絡み合ったままだったが、どちらともなくそつと小指ほどきあった。

さよならはお互いに言わなかった、普通の少年は区切りを付けるかのようにギターを持つ子に背を向けて、ゆっくりと歩み去っていった。

その少年の背が見えなくなるまで、綺麗な髪の子は手を振りながらずつとずつと見つめていた。その背を自身の目に焼き付けるかのよう、一瞬たりとも目を離さなかった。

むくり、とあなたはベッドから起き上がった。懐かしい夢を見た、といまだシャキツとしない頭でぼんやりと考えた。

小学3年生の夏休み、両親が仕事で忙しいということ、神楽坂にある親戚の家に預けられた時のこと。探検と称して歩き回り見つけた公園でたまたまであった同い年の子。人懐っこいその子のおかげも

あり、すぐに打ち解けることのできたあなたは両親の仕事が落ち着いて実家に戻るその時まで一緒にずっと遊んでいた。

その子が神と呼ぶおっさんと一緒にその子が満足するまでギターを弾いたり（神のおっさんは笑いながら「下手くそ」と言ってくるばかりだったが）、一緒に樹に登ったり、二人でキャッチボールをしたり……とにかくその時の夏休みはその子と一緒に遊びまくった。

しかし、楽しい時間というものはあっという間に過ぎるもの。始めに神のおっさんが「西へ行く」とかなんとかカッコつけてどこかへ行った。次は両親の仕事が落ち着いた自分の番だった。その子に別れを告げ、泣きじゃくるその子をなだめながらあなたとその子は約束しあった。

『自分もギター上手くなるから！ 今度会った時に最高のギターを聴かせてよ！ 必ず出会うから！ やくそく、だよ！ いつか、きつと……』

あなたと神のおっさんがギターを弾いているとき、その子は必ずキラキラした瞳であった達の事を見ていた。時にはギターを弾く真似をしていたこともあった。

神のおっさんがいなくなる時、あなたはその場に居合わせることが出来なかったが、その子が大事そうに神のおっさんからもらったものを抱えていたのを、泣いていたのを覚えている。

あなたからその子にあげられる物は無かったけど、だからこそその子との約束をした。いつか、きつと……再開したその子に最高のギターを聴かせてあげられるように。

でも……とそこまで考えたあなたは自分の部屋の押入れの方を見た。

押入れの中にはあなたのギターがある。最高の相棒だったギターがある。

あなたはギターを弾くのをある時から辞めてしまった。

幼馴染である香澄が歌を歌わなくなった時にあなたも香澄の前でギターを弾くことが無くなった。

それでもギターを辞められず、香澄の目を避けてギターを弾き続けた。たまたまあなたのギターに目に留まったという人にバンドに誘われて、参加して、運命共同体の様に同じ夢を見て、それで……

思い出に耽っていたあなたはその先の事をあなた自身を考えさせないかのように首を振った。

とにかく、あなたはギターを弾かなくなってしまった。それはつまり昔の約束を破ってしまったということである。そのことが晴れやかな朝に反するかのようにあなたに暗く重くのしかかってきた。

香澄からバンドの新メンバーを紹介するといわれていたあなたはいつもの集場所である有咲の蔵へ向かった。

朝から約束を破ってしまったことを思い出してしまったせい、その足取りは重かった。しかし、その時のギターの技術が香澄のサポートに役に立つのだから人生どう転ぶかわから無いものである。

ぼんやりしながら蔵につくと、いつもの香澄、有咲、りみの他に慣れない少女がいた。

手足がすらりと伸びたきれいな女の子だった。艶やかな黒い髪が蔵の照明に照らされて輝く。

「来たわね、零点ボーイ。うちの新しいメンバーを紹介するわよ」

「主殿！ 師匠やベンケー殿の様なちゃんくりんとは違うから心してみよ。ただし、心は奪われないように」

「は？ あんたのようなすつとこどっこいとは違う、でしょ？」

「あ、あの……紹介するね。リードギターの花園たえちやんだよ。たえちちゃんこつちは——」

「あー、どうも、よろしくつす。……で、この人何の役に立つんすか？ 賑やかかし？ いらぬんすけど」

ぴしり、と花園たえの一言で空気が凍った。

やいのやいの言い争っていたりみと有咲も、あなたにいつものよう

に微笑みかけていた香澄も凍り付いたの様に動きを止めた後、目を見開いてたえの方を見た。

あなたを見るたえの瞳には怒りの炎が宿っていた、あなたのことを明確に敵とみている。その事実にあなたは困惑した。

香澄たち3人の視線があなたを見る。その視線の意味に気が付いたあなたは首を軽く振って否定する。

花園たえの様な美少女には見覚えが無い、それは確実に言えるが……じゃあ何故怒っているんだと聞かれるとわからないのだが。

取りあえずの空気を打開するべく、あなたはたえに話しかけることにする。

「……ま、いいっす。かすみんセンパイたちが役に立つって言うんならそれで」

あなたがたえに何か尋ねるよりも早く、たえはあなたから視線をそらし話題を打ち切った。

どうするか困ったあなたは、香澄、有咲、りみの3人を見る。香澄はオロオロし、有咲は溜息をつき、りみは何故か頬を染めて目を反らした。

「……はあ、かすみん！ 取りあえず、練習するわよ。零点ボーイはかすみんのサポートに入って」

蔵の中では無敵の有咲が仕切る。

たえの事は考えずに取りあえず香澄のサポートに専念しよう……と考えていたあなただったが、時折飛んでくるたえの怒りの視線があなたに香澄のサポートだけに専念させない。あなたが香澄を的確にサポートすればするほど、瞳の中の怒りの炎は増しているようだった。

どうしたものか、とあなたは途方に暮れた。

うと考えていた。

(どういう反応するっす……?) 「美少女になったって」褒められちやったり……? いやいやそんな、美少女なんて言われても困るっす……! えへへ……)

そんな馬鹿な事を想像してベッドの上で身悶えしていると興奮してまた寝付け無くなってしまった。

しかし、当日の開演時間になっても彼のバンドは来なかった。待てども待てども一向に来る気配が無く、棄権扱いにされてしまった。

気合いを入れて精一杯のおしゃれをしたのに……とたえはその時はがっかりしていたが同時に嫌な予感もしていた。

その予感は的中し、それ以降彼のバンドを見ることはなくなってしまった。どうしたことだろうとたえは必死になって探した。中学生の身で出来ることは少なかったがそれでも頑張つて探し回った。しかし、まるで幻だったかのように彼のバンドは消えてしまっていた。

そんなある日、街中でこれまた偶然に彼と出会った。

場所はゲームセンター、男友達と一緒にゲームで遊んでいた。偶然に驚きながらたえは耳を立てれるぐらいの距離を置いて様子を窺っていた。

その中の一人がギター型の音ゲーをやろうとしたときに、彼に進めていたが彼は首を振り信じられないことを言った。

——もう、自分はギターを弾かない

彼の言葉を聞いたたえの頭が真っ白になった。

そのあとの事は覚えておらず、気が付いたら家にいた。

(約束を破るっすか……?) 自分との約束なんてどうでもいいって言
うんっすか……!?!? ……………裏切者!!)

許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許
さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さな
い許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許
さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さな

い……………！

現在・花園たえの家

空気を悪くしたまま練習を終えたたえはさっさと自分の家に戻ってきていた。自室のベッドの飛び込むと右目に怒りの炎を宿し自室の壁の一角を睨み付けた。

たえの部屋の壁の一角には彼のバンド時代の写真が壁一面に貼つてあつた。

(約束を破る裏切者は許さないっす……………！)

香澄のサポートをする彼を見たたえは改めて強く思う。彼がギターを辞めてしまった理由をたえは実は少し知っていた。

かすみんセンパイ……………いや、戸山香澄と「もう一人の女」のせい。「もう一人の女」についてはゲームセンターで見かけて以来彼のバンドの事を更に探ったおかげで知ることが出来た。

しかし、まさかかすみんセンパイが彼と幼馴染だったとは思わなかったたえはかすみんセンパイから紹介したい人の話を聞いて驚いた。

彼はかすみんセンパイが一時期歌えない時に戸山香澄の前でギターを弾くことは無かったという。つまり、戸山香澄が彼のギターに最初に傷をつけたのだ、と話を聞いたときにたえは強く思った。

そしてもう一人、彼のギターに止めを刺したと言っているいい女。あの女をどうにかしない限り彼がギターを再び弾くことは無いだろう。

だが、理由はあつたとしても約束を破つたのは彼であり、その事實は揺るぎようがない。だから花園たえは彼に対して怒りの炎を燃やす。

「自分は約束を守るために頑張ってたのに裏切者め……………！ 自分の傍に置いて一生を懸けて償わせてやるっす……………！！ もう手を振って別

れたりなんかしない、手に入れて、ぐちゃぐちゃにして、ずっとずっと手元に置いてやる……!!」

花園たえは気が付かない。彼を考えるたえの片方の目は激しく怒りに燃えているが、もう片方の目は彼への恋と憧れでいまだに輝いている事に。

たえの部屋の壁の一角に貼れている写真には2種類あった。半分は乱雑に扱われて写真に写る彼の顔に赤い×印が無数に書かれていたりピンが突き刺さっていたりしていたが、もう半分は丁寧にラミネート加工してあつたり大事そうに額縁に飾られていたりしている。彼を許さないという怒りと共に、ギターを弾かない彼の事を好ましく思っている事を。

ギターを弾かないのを決めたのは彼であるがその理由は利己的なものでなく、彼のお人好しさから来るものでもあるという事をたえは知っているから。

ひと夏とはいえ彼のお人好しな性格は知っている。だから約束を破った彼の事は許せないが、変わらない彼のお人好しさを好ましく思ってもいる。……がたえは気が付かない。相反する感情がたえの中に渦巻き、無限に続く螺旋の様に二つの感情は大きくなっていく……

花園たえの初恋はまだ始まったばかりだった。

山吹沙綾

「ごめんね、ごめんね……」

あなたは弱弱しく消え去りそうな声による謝罪と頬に当たる涙の感覚に暗闇に落ちていた意識を取り戻した。

少し、意識が朦朧としている。あなたのぼんやりした視界には一人の少女が泣きながらこちらを見ていた。

少しピンクがかかった薄茶色の髪を後ろで結っている彼女は――

――そう、山吹沙綾。あなたのかつてのバンド仲間で三刀流のライオンドラママーであり、今は――

そこまで考えたところで、あなたは不意に身体にかかる体重と暖かさを感じた。沙綾があなたに跨っている。

そこまでわかったところで、あなたは自身の現状を思い出した。

沙綾に呼ばれて彼女の部屋へ行き、部屋に入るなり彼女に押し倒されて、そして……

「ごめんね、ごめんね、ごめんね……アは、ごめんね!!」

沙綾は謝罪を繰り返す弱弱しく消え去りそうな声から一瞬で切り替えてドロドロと色々な感情が煮詰まった声を張り上げると、声に負けないぐらいに拳を振り上げて力いっぱいあなたに振り下ろした。

あなたは抵抗せずその拳を受け入れた。ズガン！ と衝撃の音がした……気がした。

拳の衝撃で揺れる視界の中、あなたの見た沙綾は張り裂けそうな三日月の笑みを浮かべながらつぶらな瞳から涙を流していた。

殴られたことの痛みよりも、彼女のそんな姿を見ることが痛い。

けれど、本当に苦しんでいるのは彼女のはずである。

何を間違えてしまったのだろうか、何が正しかったのか。

再び拳を振り上げる沙綾の姿を視界に収めながら、あなたは過去を振り返る。

あなたが山吹沙綾と出会ったのは中学生の時である。

あなたは歌から離れてしまった香澄に気を使い、公園で寂しくギターを弾いていた。

たった一月の友人との約束を忘れてはいなかった、しかし家の周辺でギターを弾くと香澄の目についてしまう可能性があり、少し家から離れた公園でギターを一人で引くのが習慣になっていた。

自己満足だ、とあなたの中の誰かがあなたに言っていたが、あなたはその声を無視し続けた。

誰もいない公園に寂しくギターの音色が響かせる日々。あなたは集中してギターを弾いていたので気が付かなかったが、変に見られていることもあるだろう。

それでも構わなかった。誰かに聞かせるための音楽じゃない、あなたの中の誰かが言う通りただの自己満足だったから。

……しかし、あの日は違っていた。

『あはは、ごめんね？ すっごくいい音だったから聴いちやってたの』
パチパチ、と演奏終わりのあなたを迎える音があった。

あなたは、そこでようやくあなたを見つめている少女に気が付いた。

拍手をしながら悪戯っ気のある笑みでこちらを見る少女――
―それが、山吹沙綾との出会いだった。

沙綾との交流の頻度は、幼馴染である香澄に比べれば劣るものの、あなたの中で彼女と話す時間は充実していた。

聞けば沙綾は小学生のころからドラムにハマってしまい、ドラム練習パッドを自作して叩いているとの事だった。

一度、彼女の自宅にお邪魔してその様子を見学させてもらったことがあるが、可憐な顔に反する烈火の如く熱い演奏を聴かせて貰った。

あなたと彼女の関係に一度目の転機が訪れる。
それはあなたが公園でギターを弾いていた時の事。

あなたは沙綾という観客が出来た事でギターを弾くのにも熱が入るようになった。

自己満足だ、という声がいぶ聞こえなくなってきた日、演奏終わりのあなたに突然かかる声があった。

『上を目指さない?』

一瞬、こちらが竦みあがりそうになるほどの強い意志を持つ瞳。

その瞳の持ち主があなたに手を差し伸べていた。

『バンドのメンバーを探している、頂点に行くために』

強い言葉を吐き出すその姿は、まるで強大な敵に立ち向かう勇者の様だったとその時のあなたは感じていた。

あなたはその勇者に中てられたのか、一も二も無くその手をつかみ取った。

勇者が言うにはボーカル、ギター、キーボード、ベースは決まっているらしい。しかし、ドラムにピンとくるのがないとの事。

……だから、あなたは沙綾を紹介した。烈火の如きライオンドラマーを知っていると。

勇者は取りあえず音を聴いてから考えるといって、沙綾の演奏を聴きに行くことにした様だ。

出会うなり、『ドラムを聴かせろ』という勇者に沙綾は目をぱちくりさせながらあなたの方を困惑した様子で見してきた。

あなたはその様子に苦笑しながら、勇者がメンバーを探している事、自分もメンバーになった事、ドラマーを今探していることを説明した。

『もう……そう言うことならちゃんとして先に説明してよね』

あなたの頭へごちんとチョップを繰り返す沙綾だったが、その眼は燃えていた。

彼女も念願のバンドを行う機会が来たことに喜んでるのが見て取れた。

そして、沙綾は勇者の前で烈火の如きライオンドラムを叩き――

あなたと沙綾の関係は「バンドメンバー」へと変わった。

勇者が集めた仲間^{メンバー}は才も意欲も溢れていた。

妥協をしない勇者の姿勢もあり、練習は厳しかったものの誰もへこたれずに付いていった。

あなたにも願いたいがあった。自分が本気で音楽をしている姿を見れば香澄はかつての星の少女を取り戻すのではないかという願い。かつて約束した少年との約束を果たせるといいたい。いつしか、自己満足だ、という声は聞くことは無くなっていった。

沙綾もまた、仲間たちと最高の音楽をするという思いを胸にドラムを叩いていた。

5人は始まりも胸に秘めた物もバラバラだったが、それでも一つとなりて大きく星の様に輝いていた。

そんな無敵の勇者の仲間^{バンド}たちは快進撃を続け、気が付けば大きなバンドのコンクールに参加することになった。

あなたの所属しているバンドは下馬評では優勝候補。そして、その実力も期待に違わぬほど。

コンクールの決勝に進んだが、他のバンドとの実力差は大きく、誰もがあなたたちのバンドの優勝を疑わなかった。

しかし、運命の神様は悪戯好きである。

あなたと彼女の関係に二度目の転機が訪れようとしていた。

バンドコンクールの決勝の当日。沙綾から父親が倒れたとの連絡が入った。

『5人がそろってこそ最強のバンド』勇者は言った。その言葉に異を唱えるものは誰もいなかった。

あなたたちは駅で沙綾を待ち続け……しかし、沙綾は駅には現れなかった。

沙綾を責めるものは誰もいなかった。

あれほど頂点を望んでいた勇者でさえ『誰のせいでもない』と沙綾に言葉をかけた。

しかし、沙綾は『迷惑を掛けたからバンドを抜ける』と言ってきかなかった。

沙綾はその日以降、バンドの練習に来ることは無かった。

あなたは他のメンバーよりも沙綾との付き合いが長かった。その分、沙綾の目にある悲しみを他のメンバーよりも多く感じ取った。感じ取ってしまった。

だから、他のメンバーが沙綾の事を諦める中、あなたは諦めきれずに何度も沙綾の元へ通い続け、話をした。

自分が店を手伝う、弟たちの面倒を見るのを手伝う、バンドに復帰しなくてもいいからせめてドラムは続けてほしい……自分でもしつこいと感じながらも何度も訴えたが、沙綾は首を振ってその訴えを退け続けた。

雨の降るある日。

あなたが沙綾を説得しようと家に向かう途中、沙綾と出会った公園に沙綾が傘もささずに一人でいるのを見つけた。

沙綾は雨と涙で濡れていた。

あなたは慌てて駆け寄ると、自分の傘を差し出した。

『ありがとう』

駆け寄ってきたあなたに一瞬驚いた後、無理をした笑みで沙綾はあなたに微笑んだ。やはりその瞳には悲しみがあるのをあなたは感じ取った。……悲しみしかあなたは感じ取れなかった。

沙綾の泣いている顔が嫌だった。ドラムを続けていなくとも沙綾には笑ってほしかった。……どこかで香澄に重ねていたのかもしれない。

だから、

沙綾の為なら何でもするから言ってくれ

あなたは沙綾にそう言った。

その言葉を聞いた沙綾は、

あなたは殴られることに関して一切抵抗しなかった。何が正しいのか、何を間違ってしまったのか、どうすればいいのか、あなたには何も分からなかった。そして、それ以上に「どうして私だけ」「苦しい、辛い」「お母さん、何で……」沙綾の吐き出す言葉が表情が、あなたから抵抗の意識を奪っていた。

今の彼女との関係は何だろうか？ とあなたは思う。まともな友人関係でないのは分かっていた。

湊、上原、白金……ごめん

沙綾のことを考える度にいつも心の中で裏切ってしまったバンドメンバーを思い出し、詫び続けている。

自分は何もできなかった、だれか沙綾を救ってほしい、とあなたは誰にでもなく願っている。

(ごめんね……)

山吹沙綾は組み敷いている少年を見ていつもそう思う。

二人の出会いが公園だった。

一人寂しくギターを演奏している少年にたまたま声をかけたのがきっかけ。

良く話すようになっていくうちに、彼のギターに変化が訪れた。寂しさが薄まり、心地の良い音楽が奏でられるようになった。

沙綾は彼のその音楽が大好きだった。いつも近くで聞いていたい、一緒に音を奏でたいと常々思っていた。

だから彼にバンドメンバーへ紹介された時もチョップはしたけれど、ものすごく喜んでいたし、練習にも本気だった。

いつも世界は沙綾の思い通りにはいかない。

母が無くなった時も、父が酒浸りになった時もそうだった。

父が倒れた。そのことを知った時、沙綾は目の前が真っ暗になった。

泣き叫ぶ弟たちを宥め、病院へ付き添い、仲間に謝罪し……コン

クールの決勝を逃した。

仲間は誰も責めなかった。皆、沙綾の事を心配してくれた。それがありがたかったが、同時に申し訳なかった。

だから、沙綾はバンドを抜けることにした。皆の夢を壊したくなかったから。せめて、彼の音楽を守りたかったから。

なのに……世界は沙綾の思い通りにはならない。

彼は足繁く沙綾の元へ通った。そのことは嬉しかったが、申し訳なさもあつた。

『私の事は気にしなくていいから、君は君の音楽を続けて』

沙綾は彼に何度もそう言ったが、彼は頑固だった。首を振り、何度も何度も沙綾の手助けをしようとやってきた。

それが――
たまらなく嫌
だった。

彼が自分の事に通ってきてくれることは嬉しい、彼が自分にかまうって音楽をしていないが嫌い、彼に心配をかけている自分が嫌い、彼が私の事を考えてくれるのが好き……様々な感情で沙綾の心の中は不安定だった。

そして、朝早くからパン屋の手伝いをし、弟たちの面倒を見て、夜に勉強のルーチンを繰り返していると肉体の方にもストレスが掛かる。肉体が弱くなると精神も引きずられる。

あの雨の日、弟たちを幼稚園に連れていった時の事、誰かが言った言葉が沙綾の胸を貫いた。

『陸くん達、時々他のお母さんを見てるのよね。やっぱりお姉ちゃんじゃ不足なのかしら』

普段の沙綾なら、ちくりと感じることはあっても笑い流すことのできる言葉。しかし、疲れていた沙綾にとっては自分が責められているかのように感じてしまった。

先生か他のお母さんか、誰が言ったのかは覚えてないが、傘もささずに幼稚園を飛び出して、彼と出会った公園で雨に打たれながら泣いていた。

そこに彼が現れた。何てタイミング！ と沙綾は運命の神を密か

とは無かった。

それ以来二人の関係は歪なものになってしまった。

彼は沙綾のお願いや我儘は本当に可能な限り聞いてくれた。

その事が嬉しいし嫌い。彼には離れてほしいし傍にいてほしい。

矛盾した感情たちが沙綾の心を苛む。

ある日、あの雨の日の様に限界を迎えた時、部屋に呼び寄せた彼を殴ってしまった。

彼は驚いていたが、抵抗する様子なく沙綾の拳を受け入れた。

馬乗りになり、彼を見下して言う。

『嫌いになった？ 逃げるなら今のうちだよ』

(嫌わないで、逃げないで……)

相反する思いが胸の中で渦巻く。

彼は逃げなかった。ただただ静かな眼をして沙綾を見ていた。

その眼が嫌い、逃げない彼が嫌い、彼が逃げないのが嬉しい、私の思い通りになる彼が嫌い、私の思い通りになる彼が好き、こんな私を嫌わなくてくれる彼が好き、こんな私を嫌わないでくれる彼が好き、こんな私を嫌わない彼が嫌い

『……逃げないんだ？ じゃあ、容赦しないからね……！』

その時の自分が泣いていたのか、怒っていたのか、笑顔を浮かべていたのか、悲しんでいたのか沙綾は覚えていない。ただ、拳を振り上げた事だけは覚えている。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね……アは、ごめんね!!」

今も沙綾は彼に向って拳を振り下ろしている。

彼に嫌ってほしいと思う自分がある、だから拳を振り上げる。

彼に逃げないでほしいと思う自分がある、だから拳を振り上げて彼を試す。

彼が嫌いだと思う自分がある、だから拳を振り上げる。

彼を好きだと思う自分がある、なのに拳を振り上げる。

男の子が好きだ女の子にワザと意地悪をするかのように沙綾は彼

に拳を振り上げる。

「ごめんね、と彼に謝罪する気持ちに嘘は無い。けれど、もう沙綾自身が自分の行いを止められない。」

これもまた特別な関係と嘯く悪魔が沙綾の中にいる。違う、とそれを否定しつつも受け入れている沙綾がいる。

「最近、ギターを教えてるんだって？ それ、辞めてよ。私の言うこと聞くんでしょ？」

笑顔で友人を傷つける言葉を吐き出す。

彼は、それだけは言う事を聞かなかった。

首を振る彼に笑顔のまま、罰だといわんばかりに、彼へごちんと拳を見舞う。

彼に嫌ってほしい見捨ててほしいと思う自分と彼に嫌われたくない離したくないと思う自分がいる。

彼がギターを教えていることを知った時、怒りと恐怖と喜びと悲しみが一度に沙綾を襲った。

それ以降、彼に拳を振り上げることが多くなったように思う。申し訳なく思いながらも沙綾は自分の心と身体を止めることが出来なかった。

（お願い、誰でもいいから彼を救ってあげて……私なんかどうでもいいから……）

間違いも正しいことも沙綾にはわからない。

再び、「ギター教えるの辞めてってば」と身体が勝手に言葉を紡ぐ。

首を振る彼に再び拳を振り上げて――

やっぱり世界は沙綾の思い通りにはならなかった。

戸山香澄・続

《これから有咲ちゃん達とお出かけしてきます。お土産楽しみにして
いてね》

日曜日の朝、そんなメールが香澄から届いた。

あなたはそのメールを確認するとスマホをおいて、ベッドに仰向け
に倒れ込んだ。

最近、あなたと香澄は一緒にいないことが多い。無論、今でも登下
校は一緒に行っているし、遊びに行くことが無いわけでもないのだが
……

『友達が出来たよ』

香澄からそう紹介されたのが昔に思える。

香澄が友達として最初に連れてきたのは牛込りみというニンジャ
な少女だった。

なんでも空気の様に気配を消している香澄を師匠と呼び始めたの
が最初の関わりらしい……なんのこっちゃ？ と首をかしげるあな
たに香澄が苦笑していたのを覚えている。

その牛込りみから炊飯器の持ち込みを大目に見てもらおうという交
換条件で市ヶ谷有咲という少女を学校へ連れてくる手伝いを香澄が
頼まれ……コミュ障気味の香澄一人にそんなことが出来るわけもな
くあなたも手伝い……なんとか学校へ連れていくこと成功し、香澄と
有咲は親交を深めていった。

それから3人で屋上で弁当を食べているときに近くでアコース
ティックギターを弾いていた花園たえに出会い、一緒に弁当に誘って
から香澄の友人になった。彼女があひと夏の子だと知った時、あな
たは非常に驚いた。……あの時の子は男の子だと思っていた。向こ
うもあなたの手を握ってぶんぶんと音がしそうなほど上下に振って
喜んでいた。……男の子だと思っていたと告げると苦笑されてし
まったが。

そのあと、かねてより香澄が机で文通していた少女と出会うことが

出来たらしい。その少女は……なんと、あなたが以前一緒にバンドを組んでいたパン屋のライオンドラマー・山吹沙綾であった。沙綾がバンドを抜けてしまったことであなともバンドを抜けてしまったが、こんなところで再開するとは思わなかった。お互いに気まずかったが、香澄が間に入ってくれたこともあり、今では普通に話をすることが出来るようになった。

香澄は高校に入ってしまったから随分と変わった様に思う。……いや、あれこそが本来、香澄が持っていたものだったのだろう。それを香澄は取り戻すことが出来たのである。

あなたはそのことを喜んだ。本当に喜んだのだが……同時にそんな香澄に対して後ろめたい気持ちを抱いていた。

香澄を皆に取られてしまったかのように思う。香澄に置いていかれてしまったかのように思う。香澄が手の届かない向こう側へ行つてしまった様と思う。香澄がいなくなってしまったら……自分には一体何が残るのだろうか。

『ごめんね、有咲ちゃん達と用事があるんだ』

あなたに軽く謝罪した香澄は身体を翻して有咲たちと手を繋いで街中へ歩いていった。

待ってくれ！ とあなたは手を伸ばして香澄に大きめの声をかけたがその声は香澄に届かない。

ならば近寄ろうと足を踏み出そうとするが、その身体は鉛の如く重く、身体を動かすことが出来ない。一步も踏み出せない。

あなたが何とか身体を動かさうともがいている最中にも、香澄たちはどんどんあなたから離れていく、段々と姿も見えなくなってきた。視界も黒く染まっていく。

やめてくれ、いかないでくれ、傍にいてくれ
.....

ハッ、とそこであなたは目を覚ました。

鈍い体を起こして時間を見るともう17時に近い時刻だった。どうやら仰向けにベッドに倒れ込んでから、今までずっと寝てしまったらしい。

ふと、あなたは自分の目もとを濡らしているものに気が付いた。
.....涙だ。

.....情けない、とあなたは自分のこと思う。香澄が昔の様に輝くことを願っていたはずなのに、今は自分の事しか考えられなかった。

香澄に会いたい、香澄と話がしたい今考えられるのはそれだけ。
香澄、とあなたは虚空に向かってただ呟いた。

「なあに？」

——心臓が飛び跳ねるかと思った。

驚いた顔で部屋の入り口を見れば、艶やかな茶色の髪を猫耳の様にまとめた少女.....香澄がそこに立っていた。彼女は.....正確に言うならば戸山家の人間はあなたの両親から何かあつたときの為と言われて合鍵を渡されている。だから香澄が部屋に入ってくるのは不思議ではないのだが.....今日は有咲たちと一緒に買い物に行ったのではないかという疑問が湧いた。

最も、香澄に会えたという思いが大きくてあなたの中で湧いた疑問はあっさりと奥に押しとどめられてしまったが。

「泣いて、どうしたの？」

香澄があなたに近づいてくる。あなたの鼻腔を香澄の女の子らし

い柔らかな匂いがくすぐる。

慣れているはずのその匂いに、ドギマギする。弱いところを見られたあなたは、香澄から目を背けて、なんでもないと答えた。

「なんでもなく、ないよね? ……あなたの傍にいたい、私じゃ頼りにならないかな?」

そんなことない、とあなたは香澄に答えた。

「あなたのそばにいたい」ただ、その言葉だけであなたは天にも昇る様な気持ちだった。しかし、同時に自分の後ろめたい部分もムクムクと盛り上がってくる。

香澄が傍にいたいと言ってくれるのは嬉しい、だがそれは香澄を縛っているだけじゃないのか? いや香澄が望んだことだ。自分が望んでいることだろう?

香澄に対する申し訳なき、自分の不甲斐なきにあなたはベッドの上で膝を抱えて丸くなる。あれだけ願っていた香澄の顔を見ることが出来なかった。

そんなあなたを香澄を丸め込むようにして抱きしめた。

「大丈夫だよ」

なにが?

「私が一番傍にいてほしいのはあなただから。有咲ちゃんやりみちやん達と一緒にいるときもずっとそれは変わらないから。ずっと、ずっとあの時から」

……でも

「あなたは私だけの星の鼓動。私はあなただけの星の鼓動。絶対に離れないから……」

「だから、あなたの思いを聴かせて」

……香澄に傍にいてほしい。

「うん」

……一緒にいてくれる?

「うん」

どんな時も、だよ?

「勿論だよ」

そこであなたはようやく顔を上げて香澄に向き合った。

香澄は静かに微笑んでいた。その頬は朱に染まっていたが、瞳は星の様にキラキラしていた。

ああ、とあなたは声を出した。香澄が愛おしい、傍にいてくれることがこんなにも嬉しいだなんて。

そこでああなたはようやく自覚した。香澄から離れられないのは自分の方であると。香澄はそんな情けないあなたをとつくに受け入れてくれていたのだと。

香澄があなたに顔を近づけた、あなたからも香澄に顔を近づける。そして唇と唇が軽く触れ合った。唇が軽く触れあっているだけなのに、あなたの全身は沸騰してしまいそうな程の熱を感じた。

数秒か数分か、2人はただただ唇で触れ合っていただけだったが、どちらともなく顔を離した。

香澄の顔は先ほどよりも真っ赤だった。あなたはそんな香澄に微笑みかけると香澄は俯いてしまった。

いつか星見の丘まで一緒に出掛けよう、あなたは香澄に提案した。あなたにとって何よりも香澄との思い出が深い場所だ。あの子ども時から一度もあそこへはいっていない。いつか、あなたは香澄と再びあの場所へ行きたかった。

「勿論、いいよ。あなたとならどこまでも」

香澄はあなたの言葉に笑って答えた。

その時、私は頭の中でグツグツとマグマが煮えたぎっている様に感じた。

『彼』の事は何でも知っていると思っていた。思い込んでいた。

だから、『彼』は私から離れられないし、私は『彼』から離れられない

いと思っていた。

『うわ——！ 久しぶりっす！ 元気にしてたっすか!? ……え？ あー……自分、よく男の子と間違えられていたから気にしないで欲しいっす！ ところで昔した約束の事って覚えてるっすか？ ……あはは、実は自分もあんまり覚えてなかったっす。でもまた会えて嬉しっす！』

どうして、たえちゃんと知り合いなの？ 昔した約束って何？ 2
人ともあんまり覚えていないみたいだけど……『彼』がそんな約束してたなんて知らない……

『え、あ……その……ひ、久しぶり、だね……あはは、私は元気だよ。その、君は今何して……うん、そうなんだ。……あの、さ……バンド……ううん、なんでもないよ』

どうして沙綾ちゃんと知り合いなの？ バンドって何？ なんてそんな雰囲気なの？ そんな『彼』、私知らないよ……

私の頭の中でグツグツと煮えたぎっていたのは嫉妬だった。それを自覚すると同時に様々な事が私の中から湧き出てくる。

私の知らない『彼』の事を知っているたえちゃんに、沙綾ちゃんに対する嫉妬。

『彼』の事で私の知らないことがあったことへのショック。

もしかしたら『彼』が私以外の別の所へ行ってしまうんじゃないかという恐怖感。

瞬間、私の頭の中は凍り付いてしまった。あれほど煮えたぎっていた嫉妬は一瞬で『彼』がいなくなることへの恐怖感で埋め尽くされてしまった。

(嫌だ……嫌だ、嫌だ……！ 『彼』がどこかへ行っちゃうなんて、そんなの嫌だ！)

それから私は『彼』が私の友達と……特に『彼』の知り合いである
たえちやんや沙綾ちゃんやと極力一緒にならないように動き回った。

3人でいることはあるが、『彼』が私以外の女の子と2人でいること
は殆ど無かった……と思う。

でも、今度はそんなことをしたら『彼』に嫌われてしまうんじゃない……
という別の恐怖が湧いて出ていた。ぐるぐると色々な恐怖が私の中
で渦巻いていた。

……………あの時まで。

それは、たまたま皆で出かけてから自宅に帰って来た時の事。

『彼』が私の家にいた。

どうやらお母さんが『彼』を夕食に誘ったらしい。そのこと自体は
珍しくもない、お母さんがよく『彼』に世話を焼くから。しかし、私
の家には来慣れているはずの彼の態度が妙に落ち着きが無いとい
うか、そわそわしているというか……不思議に思っただけで首をかしげて
いたら、『彼』が私に声をかけて来た。

お帰り、その……最近皆と出かけることが多いね、楽しい、のかな
？ と

『彼』の揺れる瞳と少し震えるような声で私は理解した。

私が『彼』を皆に取られてしまうんじゃないかと心配してたように、
『彼』もまた私が皆に取られてしまうんじゃないかと心配していた。

穏やかに微笑んで「楽しかった」と答える私だったが、内心は暗く
嗤っていた。

(何だ、やつぱり……『彼』も私から離れられないんだ……えへへ)

それから、私は『彼』の恐怖心を煽るかのように皆と遊びに行った。
あるいは一人の時でも遊びに言ったかのように振舞うこともあった。
《行ってきます》と《帰って来たよ》をちゃんと連絡すると、飛びつく
ように彼から返信があった。それは《行ってらっしゃい》や《お帰り》
の様なごくありふれたものであったが、その早さに私は『彼』の恐怖

心を感じることが出来た。

買ったお土産を渡すときの『彼』の瞳から読み取れる嬉しさと安堵感は忘れられない。私を失うことに対する『彼』の恐怖感は嬉しかった。

その日も本当は一人だったのだが、買ったものを渡すために家にいる『彼』の家の合鍵を使って『彼』に会いに行った。

『彼』の家に行ったのは12時くらい。ちよつと早すぎるかな……嘘つてばれないかなと心配しながらだった。

『彼』はベッドで仰向けに寝ていた。私が連絡をした後、すぐに眠ってしまったらしい。起こすのも忍びなかったので、『彼』の寝顔をずっと見ていた。

寝顔を見ているだけでも幸せだったが、さらに幸せなことが起きた。

香澄……いかないでくれ、と『彼』が涙を眦に溜めながら寝言を呟いた。

心臓が嬉しきで飛び跳ねて出ていってしまいそうだった。

その後、起きた『彼』を包み込んであげる様に接した。顔は中々見せられなかった、嗤っているだろうから。

傷ついている『彼』を見ると、罪恶感も込み上げてくるが、それ以上自身の心情を素直に吐露してくれる『彼』に幸福感を感じていた。『彼』の告白には素直に応じた。断る理由なんてどこにもなかったから。

そのまま勢いで……つい、キ、キスまでしちゃった……えへへへ……

ようやく……ようやく私は私だけの星の鼓動をちゃんと手に入れることが出来た。幸せでいっぱいだった、こんなに幸せだと思うのは初めてかもしれない！

大丈夫だよ、あなただけの星の鼓動もちやんと傍にいるから……あなたは私だけのもの！ 私はあなただけのものだから！

数年後、星見の丘に2人の男女がいた。

2人はしっかりと手を繋ぎながら笑い合って満天の星空を見上げていた。

やがて、女の方がのびやかで透き通る声で歌を歌い始めた。それはありふれた、「きらきら星」だった。

それを男は世界中でどんな曲よりも大切であるかの様に目を細めて静かに聴いていた。

その男女の左手の薬指には、お揃いの指輪が静かに輝いていた。まるで、お互いがお互いだけのものであるかを証明するかのよう

市ヶ谷有咲・続

「明日って予定は空いてるかな？ もし、予定が空いてるなら白鷺ショッピングモールと一緒に買い物に行ってくれないかな？」

学校からの帰り道、あなたは香澄にそう尋ねられた。

明日……とあなたは無意識に呟いた。今のところ予定は入っていないかったが、実はこれから予定を入れようとしていたのであった。

あなたはせっかくの香澄の誘いをどうするか少し悩んだが、今回は自分の都合を優先させてもらうことにした。

あなたは、ごめんね、と香澄に返事をする。

「そっか……用事があるなら仕方ないよ。私の事は気にしないでね」
そういう香澄だったが、あなたに断られると少し寂しそうに微笑んでいた。

あなたはそんな香澄の微笑みを見ると、ちくり、と胸が痛んだ気がした。

自分の用事の都合が付かなかつたら一緒に……と、あなたは香澄に伝えようとしたが、それも失礼な話か、と思い直し。また今度ね、と返事をするにとどめておいた。

「うん……また今度ね。……話は変わるけど、最近あなたって少し変わったよね」

香澄の言葉に首をかしげ、そうかな？ と聞き返すあなた。香澄は笑って「そうだよ」と返した。

「髪型とか服装とか小物とか……ちよつとお洒落になったかな」

お洒落になった、か……

褒め言葉、なのだろう。あなたはそう思うことにした。まあこの幼馴染との付き合いは長い、彼女が皮肉を言ったりすることは殆ど無いということをおあなたは知って

——幼馴染だからと言ってなんでも知っていると思つたら大間違いよ！

そんな声が脳裏をよぎった。

その言葉の言う通りかもしれない。確かに、予定を断られて意趣返りで香澄がそう言った可能性もある。いや、彼女がそんな事をいうはずはないが……それでも可能性としてあるということは考えねばならない。

……いや、でも……とあなたは香澄そっちのけで考え込んでしまった。

「えっと、どうしたの？」

香澄の言葉に、思考の海に沈んでいたあなたは、ハッ、と現実に戻された。

……先ほどの言葉の意味を確かめるべきだろうか。

いやそれこそ失礼か、と思いき直し首を振ったあなたは、なんでもないよ、と言つて香澄に微笑んだ。

「なんでもないようには見えなかったけど……何かあったら話してね」

そう心配そうにこちらを見る香澄に対し、あなたは苦笑した。

ほんとに何でもないのだ、一々悩むことでもない。過去の出来事があつたとはいえ、この幼馴染は色々と心配性で

—————
それって相手の事を信じてないってことじゃない？

そんな声が再び脳裏をよぎった。

香澄に心配を掛けまいとあなたは脳裏によぎった声を無視して表情には出さずに、家のある方向に向かいながら香澄とたわいもない話をして帰っていった。

あなたは香澄と別れて家に帰るとすぐに相手に予定の確認のメールを送った。メールを送ってから数分後、その相手からメールが返ってきた。

《いいわ、いつもの蔵で待ってるから》

あなたが予定を入れた相手……市ヶ谷有咲はすぐにオツケーを出してくれた。

そのことにホツとしつつ、あなたは有咲の家に行くための準備をすることにした。

何せ、有咲はポピパの為にゲーム関係の物をすべて売り払ってしまったので、ゲーム関係の物はあなたが家から持って行かないといけない。それ以外にも有咲が提出するように言ったゲームのレポートもあるし、有咲の所に遊びに行くのであれば格好もきちんと整えなくてはならない……そこまで考えたあなたは、まるでデートに行くみたいだ、と苦笑した。

そういえば、とあなたはベッドの中でうとうとしながらふと思った。有咲の所へ遊びに行くようになってから私物が色々増えた気がする。

以前、リュックサックでゲーム機を持ち運んだら有咲から「もっとゲーム機は大事に持ち運べ」と言われて、ノートパソコン用のPCバッグを購入して有咲の家に運ぶようになった。ゲームの種類も今までのRPG系から、ADV系やSTG系やPZL系などの幅広いジャンルを遊ぶようになった。

「女の子の家に来るんだから身だしなみをきちんとしろ」と言われて、今まで服装には無頓着だったので小洒落た白いパンツやワイシャツなんかを数着購入した。スタイリング剤も買ったし、ふんわりと香る様な匂いの強くない香水も購入した。アクセサリー類も安価なものではあるが身に着けるようになった。

出費は多かったが有咲に褒められるのは嬉しかったし、そのおかげで今までとは違う体験をすることも出来た。

有咲には感謝しないといけないな……あなたはそんなことを考えながら眠りについた。

「来たわね、待ってたわよ」

翌日、いつもの蔵の前に約束相手の有咲が腕を組んで待ち構えていた。

おはよう、と有咲に挨拶すると、「おはよう」と返す有咲だったが、その視線はあなたのつま先から頭頂部までを確認するように行ったり来たりしながら見つめていた。

緊張しながらあなたが有咲の言葉を待っていると、有咲は「うんうん」と気分良さに頷いた。

「中々いいカッコしてるじゃない。……まあ、満点はあげられないけどそれなりに高評価してあげるわ」

有咲からの高評価にあなたは胸を撫で下ろした。同時に褒められて嬉しいという感情と満点でなくて残念という二つの感情が沸き上がってきた。

ちなみに満点でないのはどうして？ とあなたは有咲に質問してみることにした。

「そう簡単に満点なんて取れるわけないでしょ。まだまだこれからよ、これから」

出来の悪い生徒を叱る様な教師の目で有咲に言われてしまった。

あなた自身、お洒落している自分になれていないこともあり、有咲の言葉に、それもそうか、と妙に納得してしまった。

「でも、まあ、そうね、すぐにでもできる改善点を、敢えて、あげるなら……」

勿体付けた様な言葉と共に、ゆっくりとした動きで有咲はあなたの首元を指さした。

「……その、星型のペンダント、あんたに似合ってるわ」

えっ、とあなたは驚いて声を出してしまった。

せっかく教えてくれたのにそんな態度を取ったあなたに、有咲は儼然とした表情で腕を組んでしまった。「減点ね」と言う呟きが聞こえた

この星型のペンダントは香澄にもらったもので……と説明するあなたに、有咲はわざとらしい溜息をしながら俯いてしまった。

数秒俯いた後、有咲は儼しい表情をして顔を上げた。

「かすみんからのプレゼント、ね……まあ、それなら付けちゃうのはわかるわ」

でも、と続ける有咲。

「あなたのそのコーディネートにそのペンダントはちよつと似合っていないわ。今すぐはずせ、とまでは言うつもりはないけど……仕方ないわね、今度そのコーディネートにあったアクセサリーを買ってあげるわ」

えっ、とあなたは驚いて再び声を出してしまった。

何というか……有咲がそう言ってくれるのは珍しい。「不満？」と聞いてくる有咲に、そんなことない嬉しいよ、とあなたは感情をこめて返事をした。

その言葉に機嫌を良くしたのか、有咲は花の様に微笑んだ。

「じゃあ、来週に白鷺ショッピングモールへ買い物に行きましょ。ちちゃんとエスコートしなさいよ」

仰せのままに、とあなたはちよつとおどけた様子で有咲の提案をも二も無く了承した。

———そういえば、白鷺ショッピングモールって最近どこかで聞いたな、とあなたは思い出そうとしたが、有咲に蔵の中へ誘導されて、すぐに考えるのを辞めてしまった。

蔵の中に入ると、さつそく書いてきたレポートをあなたは有咲に渡した。

レポートというのが実際は遊んだゲームの感想文であり、そんなに形式ばったものではない。

今回のレポートは「ガールズパーティー」といういわゆるギャルゲーで5人の女の子が攻略対象のゲームだ。

メインヒロインの能天気系元気女子、由緒正しいツンデレ系盆栽ガール、チョココロネ好きの内気系女の子、美人な不思議ちゃん、すこし影を見せるところはあるけど澁刺した家族思い少女……彼女たちと仲良くなつて最終的には恋人になるというよくあるギャルゲー

だ。

「ふうん……あんたはこの由緒正しいツンデレ系盆栽ガールが一番好みだとおもったのね……ところで、何で理由が書いてないのかしら？」

提出したレポートを確認しながら有咲が確かめて来た。

……ごめん、大きな理由は無いんだ、と有咲の質問に返すあなた。本当に理由が無いのだ、ただ直感的に、その子が一番かなと思っただけである。

「……ん、なるほどね。まあ、それなら仕方ないか。次はちゃんと理由がかけるようになりなさいよ」

あなたの言葉を受けた有咲は優しく微笑んだ。

有咲のこの反応は取りあえず、有咲の好みと一致した証である。

良かった、と思つて有咲に笑い返ししながらあなたはゲームの準備を始めた。

《一緒に白鷺ショッピングモールへ行こうって誘ったんだけど断られちゃった……》

《師匠もか。うちも主殿を忍者カフェへ誘ったが、断られてしまったぞ》

《……あれコスプレする奴でしょ？ りみりん、皆に断られてない？》
《沙綾センパイ辛辣っす！ ……あれ、自分誘われてないようない……》

ポピパの皆のそんなやりとりをあたしはほくそ笑みながらLINEで見ている。

さいきんの「あいつ」は以前よりもお洒落に……ううん、「あたし好み」になった。

「あいつ」をヒロインに合わせるように育成するのは大変だった。お邪魔キャラが一人かと思いきや、後から3人もお邪魔キャラがやってきて、次々と違う方向で邪魔をしてくる。

一緒にいる時を狙って「あいつ」に色々教えた。

些細なすれ違いから幼馴染同士が喧嘩したり戦い合ったりするゲームやアニメを一緒に見て、

「幼馴染だからと言ってなんでも知っていると思ったら大間違いよ！」

と言ったり。

相手の事を心配していつも「守る」と繰り返し話をしたり、会いに来る主人公がいる作品と一緒に見て、

「それって相手の事を信じてないってことじゃない？」
と言ったり。

少しずつ時間を掛けてここまで育ててきたのだ。

その結果、最近の「あいつ」はかすみんよりもあたしを優先するようになったし、あたしに合わせようと様々の物を買うようになった。

順調だ、お邪魔キャラは多いが今のところ順調に育ってきている。そんなときに「あいつ」からメールが来た。

内容は明日遊びに行ってもいい？ というものだった。

「あ、あはははっ！」

すぐにオツケーの返事を筒と同時に、おかしくておかしくて笑い転げてしまった。

最初に誘ったかすみんよりもあたしの事を優先したことに！ 誰にでもなく勝ち誇った様な笑い声を上げてしまった。

翌日、「あいつ」が家にやってきた。

今までのちよつと無頓着な格好とは違う、あたしの指導した通りの

服装と髪型をして。

内心の笑みを抑えるのに必死だった。

「中々いいカツコしてるじゃない。……まあ、満点はあげられないけどそれなりに高評価してあげるわ」

本当に満点を上げたいぐらいだ。

ただ、一点。誰があげたものかすぐにわかる星型のペンダントを除いては。

「そう簡単に満点なんて取れるわけないでしょ。まだまだこれからよ、これから」

満点でないのはどうして？ と聞いてくる「あいつ」に、星型のペンダントに対する怒りを感じながら、「あいつ」に感じ取られないように少しそっけなく返す。

「でも、まあ、そうね、すぐにでもできる改善点を、敢えて、あげるなら……」

これは、一種の賭けであった。恐らく、「あいつ」の大事な幼馴染からのプレゼントであろう、「それ」。

勿体付けた様な言葉と共に、ゆつくりとした動きであたしは「あいつ」の首元を指さした。

「……その、星型のペンダント、あんたに似合ってないわ」

その言葉を受けた「あいつ」の反応は劇的だった。

の星型のペンダントは香澄にもらったもので……と説明する「あいつ」の顔はあたしの不機嫌を買うまいと必死に説明していた。本人は気が付かなかったようだけど、以前の「あいつ」なら、かすみんを説明に使うなんて考えられなかっただろう。

顔が裂けてしまうほどにやけてしまう

咄嗟に俯いて「あいつ」から顔を反らす。

数秒してにやける顔を厳しい表情へとなんとか変えて、「あいつ」を正面から見据える。

「かすみんからのプレゼント、ね……まあ、それなら付けちゃうのはわかるわ」

納得したように振舞うが本当は全く納得していない。

「ここまで『あいつ』を育ててきて、まだお邪魔キヤラが『あいつ』を妨げようとする。」

その事実だけでも頭がグラグラしてしまおうそうだ。

——だから、容赦はしない

「あなたのそのコーディネートにそのペンダントはちよつと似合っていないわ。今すぐはずせ、とまでは言うつもりはないけど……仕方ないわね、今度そのコーディネートにあったアクセサリーを買ってあげるわ」

えつ、と驚く『あいつ』だった。本人でも気が付いていないだろうが、その表情は驚きに喜色が混じっていた。

「不満？」とわざとらしく聞いてみるが、『あいつ』は本当に嬉しそうな顔で、そんなことないよ、と否定した。

笑みがこぼれる……これから先のことを考えて。

「じゃあ、来週に白鷺ショッピングモールへ買い物に行きましょう。ちゃんとエスコートしなさいよ」

（かすみん、あたしが先に行くからね。ふ、ふふふふふふふふふふふふふふふ）

笑みがこぼれる……お邪魔キヤラを上回れる優越感に。

（じつくり、じつくり……お邪魔キヤラをあんたから追い出して、ハッピーエンドを迎えさせてあげる。かすみんも……『Bang Dream!』のトゥルーエンドを迎えさせてあげるわ。そっちもしっかりしないよね）

あたしは2つのゲームを続ける。

まだまだ、先は長い。それでもこの先に楽しいステージとエンディングがあると信じて……

？

牛込りみ・続

ついてない、とあなたはベッドで横になりながら心の中でごぼした。ごぼつごぼつ、と咳も同時についてきた。もう、何度目になるだろうか。

世間はせっかくの大型連休。晴天が続き気温も落ち着いているまさに絶好の遊び日和！……のだが、連休初日から風邪をひいてしまったのか熱を出して咳が出ている。これが多少のものだったら、外出は諦めるが室内でゲームなどして遊んでいるのだが、倦怠感も強く何もやる気が起きず、ベッドの上で過ごす日々を送っていた。

しかも今でこそ何とか色々考えることもできるようになっていたのだが、連休初日の方はまさしく熱に浮かされた状態であり、意識が朦朧として何をしていたのか何を考えていたのか記憶にない。食事をも何を食べていたのか覚えていない。ゼリーとかだろうか？ でもそんなもの買ってあったのかな……まあ、不都合でないからいいかとあなたは深くは考えなかった。

更に運の悪いことに、連休前に携帯を紛失してしまった。市ヶ谷家の蔵に忘れ物をするのはたまにあったりするが、そんな時は有咲から連絡が来るので大事には至らなかった。

いや、携帯が無いから連絡が出来ないだけか？ 有咲に家を案内したっけ？ ああでも香澄が知っているから……ということは、やっぱり有咲の家に置いてきてしまったわけではないのか？ そんな事を最初の方は考えていたが、熱のせいで段々と考えるのも億劫になってしまった。

倦怠感のせいで医者にも行けていないので、仕方なく家にある常備薬で対応するしかなかった。食事は食欲もあまりないのでゼリーやらフルーツの缶詰やらで何とかしのいでいる。……そういえば、我が家にこんなゼリーとか缶詰とかあったっけ？ とあなたは最初訝しんだが、体調が悪かったこともあり、自分の勘違いだったことにして特に考えていなかった。

ごぼつごぼつ、と咳が再び出てきたのであなたは寝ることにした。

もつとも寝すぎていて寝付くのに時間がかかってしまうのだが。せめて連休中に体調を治せるようにしよう、そう考えたあなたは布団を被った。

ふー、とあなたは息を吐いた。

結局、連休中は寝込むことになってしまったが、体調を治すことに専念したおかげか、連休明けには元気な状態を取り戻した。

携帯どうしよう……とぼんやり考えながら、途中まで一緒に登校する香澄の事をいつもの通学路の途中で待った。

……のだが、一向に香澄が現れない。ちらりと腕時計を確認するともうそろそろ学校へ向かわないと遅刻してしまいそうな時間に差し掛かって来た。

どうしたのだろうか？ とあなたは首をかしげた。あの幼馴染が遅刻や無断欠席などをするなど考えられない。連絡を取ろうにも携帯電話が無いのでこちらからは連絡が出来ない。向こうもあなたが形態を紛失したことは知らないはずなので繋がらないと首をかしげているのでは……と思っただが、そうであれば家に電話を掛ければいいはずだ。幼馴染だけあって、香澄はあなたの家の電話番号を知っている。欠席や遅刻となればその時間に家に電話がかかってくるはずだが……

どうしようか、あなたは考えたが。そろそろ間に合わなくなる時間になってしまったので、心の中で香澄に詫びたあなたは学校へ向かって走り出した。

遅刻ギリギリの時間で教室へ滑り込むことが出来たあなたは、呼吸を整えてクラスメイトにおはようの挨拶をした。

のだが、何故かクラスメイト達のこちらを見る目が妙に生暖かい。ニヤニヤ笑っている者もいる。

首をかしげつつ、とりあえず席に着いたあなたに隣の席の友人がニ

ヤニヤしつつ、肘で突いてきた。

「やったじゃん！ 今日はどうした？ もしかして……ヤツたじゃん！? その疲れで珍しく遅刻しそうだったのか!? くー、羨ましい……!」

そう楽しそうに話しかけて来た友人の言葉にあなたが首をかしげているうちに、学校の風紀委員で友人の恋人でもあるクラスメイトの少女が「朝から下品です!」と友人の頭をはたいた。

「何すんだよー」と言いながらも、楽しそうな表情を浮かべる友人に、表面上は怒っている様な言葉を掛ける友人の恋人。いつものいちやつきが始まったことに、あなたは……否、あなたを含むクラスメイト達は、ご馳走様と溜息を吐いた。

放課後、結局友人やクラスメイト達のニヤニヤの理由がわからず下校することになった。スマホどうしようかな……と考えながら歩いていたあなたの目に見覚えのある少女が飛び込んできた。

長く美しい黒い髪にすらりとした手足、パーカーが標準装備の美少女……花園たえ。

あなたは体調を崩してスマホをなくしたため連絡を取ることが出来なかった友人に気軽に声をかけた。

「あ、あ……えっと……ど、どうもつす……へへ……そ、その……おめでどうつす! じゃ、じゃあ自分はこれで!」

あなたが声を掛けたらたえはびくつと反応した後、泣き顔を無理矢理笑顔で整えたかのような表情をした。

あなたの想定外の反応をしたたえに呆然としてみると、たえはあなたに背を向けて走り出してしまった。

何がおめでどう? どうして泣きそうなの? と頭の中でぐるぐると疑問が渦巻き、あなたは走り去るたえの背中をただただ立ち尽くして見送るだけだった。

『あ……おめでどう。えっと……その、君が……うん、君が幸せならそ

れでいい、かな……あはは。出来ればちゃんと欲しかったけど……うん、その、ごめんね。まだ、気持ちの整理が付いてなくて……今日は帰ってくれる?』

『はあ……この零点ボーイ……ったく、そういうことならちゃんといいなさいよ……ああもう、おめでどう! これでもいいんでしょ!? ……ばか、追ってこようとしないの。最後のミッションよ……』
ヤマブキパンで沙綾に、近くのコンビニで有咲に出会ったが、たえと同じ感じが続いていた。

正直泣きそうな顔でおめでどうと言われても何が何だかわからない。話を聞こうにも遮られたり、追い出されたりしてしまい叶わない。

朝からクラスメイト達といい有咲達といい……と、ぼやいたあなたはそつと溜息をついた。

「あ、あの……」

そんなあなたに背後から声をかける人物がいた。
わざわざ確認するまでもない、十数年聞いてきた声であった。

その声の持ち主——戸山香澄は、やはり有咲達と同じように瞳を少し潤ませていた。

あなたに声をかけた香澄は俯いてもじもじした様子を見せていたが、やがて顔を上げて意を決したように——瞳は更に潤んでいたが——言葉を吐き出した。

「あ、あの……おめでどう! ……それじゃあ、私はこれで……」

背を向けてどこかへ去ろうとする香澄の腕を、待って、という言葉と共につかんであなたは香澄を引き留めた。

ひう、と息をのむ香澄だったがあなたも朝から色々と言の分らない事を言われているのだ。一方的に言われるだけではなく、少しぐらい話をしてもらってもいいのではないだろうか。

あなたは香澄に、何故今日あった皆が自分におめでどうと言うのか教えて欲しい、と尋ねた。尋ねてから、少々問い詰める様になってしまったと少し反省した。

一方、それを尋ねられた香澄は少し首をかしげていた。あなたが何

故そんなことを聞いてくるのかわからないといった様子だ。

「……だって、付き合うことになったんでしょ？」

付き合う？ 香澄のその言葉に今度はあなたが首をかしげた。

誰と？ 何に？ 最近スマホを紛失して誰かと連絡を取る暇もなかったあなたには心当たりがない。

買い物？ 練習？ いや、どちらにしても、祝福されるほどの事ではない。

あなたが首をかしげて困惑していることを香澄も感じ取ったのか、香澄もサイド首をかしげた。

「えっと、りみりと付き合う事になった、んだよね？」

りみと？ 何を？ あなたは首をかしげるばかりだ。

香澄も首をかしげていたが、唐突に「そうだ」と言つてカバンからいそいそと自分のスマホを取り出した。

香澄はスマホを操作して、「はい」とあなたにその画面に映っていた画像を見せた。

その画像を見たあなたは——目を見開くほどに驚いた。

何故なら、その画像には、あなたとりみがキスをしている場面が映し出されていたからだ。

「お待ちしていたぞ、主殿」

画像の件を尋ねるべく、あなたはりみに会うことにした。

香澄にスマホからりみに連絡を取ってもらい、待ち合わせることにした。

最初は香澄にもついてきてもらおうかと悩んだが、りみが「2人きりがいい」と言っていたというので、香澄と別れてりみに会う事になった。

待ち合わせ場所は花咲川近くのカフェ。男女のカップルが多いことで有名である。

りみはそのカフェの席の一角に腕を組んで座っていた。

「いや、もう主殿ではなく……だ、旦那様と呼ぶべきか、うむ」

頬を赤らめて呟くりみの言葉を聞き流したあなたは、りみの前の席に座った。

聞きたいことがある、とあなたは会話を切り出した。

あの画像は何なのか、何故皆が自分とりみが恋人になったと思っているのか、どうしてあの画像が無くしたはずの自分のスマホから送られてきているのか。

矢継ぎ早になってしまったあなたの質問に対し、りみは「うむ」と前置きし、先に注文してあったであろうチョコレートアイスをスプーンで口に運んでから答えた。

「連休初日の方、旦那様が体調が最悪の時に看病したのは、うちだ」

え？ とあなたは驚いた。体調が最悪だった連休初日の方は確かにどうやって生活していたか覚えていない。りみが看病していた……？

「粥を食べさせたり、汗を拭いたり……大変だった。いやー、ホンマめっちゃ大変だったで。うちもまだまだシユギョウが足りぬ、それを自覚した」

大変だったと自慢したいのか、りみは薄めの胸を薄く反らして誇るように言った。

あなたは困惑するばかりだ。

「しかし、シユギョウが足りなからうかが何だろうか主殿の看病を止めるわけにもいかない。とはいえシユギョウ不足のみでは疲れは溜まる一方。そんな時にうちは主殿に聞いた、うちと付き合ってくれへん？ 」と

待つてほしい、疲れたのも大変だったもの分かるがどうしてそうなるのか。

「愛する人の世話は疲れないとよくやっているだろう。うちもそれにならった。そしてうちの告白に対し主殿は「勿論」と言った。それで主殿から旦那様へとクラスチェンジしたというわけだ」

「証拠もあるぞ」そう言ったりりみはスマホをいじり、録音されている音声を流した。

確かに、りみの告白に対して「勿論」と言っている自分の声があつ

た。

あなたは唾然とした。何せ全く覚えが無いのだ。しかし、りみはそんなあなたにかまわず話を進めた。

「恋人になったらそれらしい事をしようと、眠る主殿にお休みの……キ、キスをした。その写真を撮った。嬉しくて嬉しくて、うちは皆に写真を送ってしまった」

そうだ、何故あなたのスマホをりみが持っているのか？

それも疑問だったあなたは頬を赤らめて自身の行いを告白したばかりのりみに尋ねた。

「ああ、それは簡単だ。うちがスマホを拾ってそれを旦那様の家に届けたら、そこで病床の旦那様を発見した。それだけ。パスワードは適当に打ち込んだら解けたぞ。もうちよつと複雑なものにした方がいい」

あつさりしているが……まあ、そんなところか。

パスワード自分の誕生日を反対から入力しただけでは簡単すぎたか。とりあえず、スマホの件は納得した。

しかし、自分には彼女と恋人になる返事を記憶した覚えが無いのだ。返事をした証拠はあるが、やはり曖昧なままにするのはよくない。

りみの事は嫌いじゃないけど……とあなたはりみに声をかけた。

「旦那様は……うちではダメか？　うちは、めっちゃ好きやねん。じゃなかったらキスなんてできないし……」

うっ、とあなたは言葉を詰まらせた。

りみが一方的にした事と考えてしまうのは簡単だ。しかし、仲の良い相手とはいえ、キスをするぐらい本気だったのも事実だろう。

りみが顔を伏せた。肩を震わせてすすり泣く様な声を出している。あなたがオロオロして周囲を見渡したら、他のお客から突き刺さる冷やかな視線に気が付いてしまった。

う、と再びあなたは言葉を詰まらせた。りみの事は嫌いではない、というか好きである。しかし、その好きが異性に向けた物かと言うと……

あなたはそつと自分の唇に指をあてた。りみがここにキスをした、そう思うと頬が真っ赤に染まりそうなほど熱を持った気がした。

熱があったときの自分がどういう気持ちで返事をしたのかがわからない。しかし、そういう返事をしたという事は、今のこの頬の熱が示すものは、目の前で肩を震わせる少女を見て思うものは……

あなたは一度目を閉じる、数秒立つてから意を決した様に眼を開いた。

りみ、自分でよければ。とりみに微かな声で、しっかりと意思のあ
る声で言葉を掛けた。

りみは顔を上げた、その瞳には輝くものがあつた。

「……うちでいいの？」

勿論、とあのスマホの録音の様に言葉を返した。

周囲の冷ややかな視線はいつの間にか温かいものへと変わつて
いった。パチパチと拍手が聞こえて来て、あなたは照れてしまった。

「では、これからよろしく、旦那様！」

ニンジャ少女は星の様に輝く笑顔を浮かべた。

上手くいった！ 星の様に輝く笑顔の裏で少女は暗く笑った。

主殿のカバンからスマホを拾い、拾ったスマホを返すのを口実に主
殿の家に行った時、熱にうなされてる主殿を見つけた。

勿論看病はしたが、それ以上ない絶好のチャンスだった。

朦朧とする主殿に告白した。実の所、体調不良でそれどころではな

い主殿からの返事は無かったが、好都合だった。

主殿をつけ狙う「女」どもから護衛をするために、盗聴器を仕込んであった。その中で聞こえた言葉から告白の返事になりそうなものをピックアップして編集した。後は主殿のスマホからキスをしている画像をばらまいた。

その画像を見て周囲がどう思うか。年頃の少年少女は、誰もがそういう関係になったのだろうと、期待を込めて邪推するだろう。勝手に周囲の方から逃げ場を埋めてくれる。

後は色仕掛けである。

(師匠。やはり師匠は凄い。泣くのがこんなにも効果があるとは……だが、巧遅に過ぎたな)

泣いたのはニンジャ、特にくのいちお得意の演技である。

敵の存在を知ってから、ずっと磨いてきた。それがついに役に立った。

この恋人が多いカフェを選んだのも、りみの策略である。周囲の視線も、主殿の背中を押す力になるだろうと、選んだ。

(主殿は……旦那様はうちが守る。もう、師匠もベンケー殿もうさぎ殿も獅子メタル殿も手出しできぬだろう。所詮、ドシロート。うちが本気を出せば、相手にはならなかったか……)

ふっ、と内心でバンドメンバーに向けて勝利の息を吐くりみ。

なお、実のところは運がよかっただけというのもあるが……それを言っても「運も実力のうち」と返されるのが関の山だろう。

(出来れば20代の半ばまでにはケツコンしたいな。子どもは何人必要だろうか？ ベースを……いや、ドラムやボーカルやキーボードを覚えさせて家族でバンドしたいから最低3人か。ということは夜の相手も……はよ、学んで旦那様を満足させねば！)

これから先のことを考えて、りみは星の様に輝く笑顔を、内心でも浮かべた。

気に食わない、気に食わない、気に食わない、気に食わない、気に食わない、気に食わない……！

ギターを辞める原因となった沙綾もそんな相手と平然と関わる。彼も、何もかもが気に食わない。

たえの怒りが音楽にも表れているのか、強く音を出し過ぎてしまったり、細かな所でミスをしてしまうことも最近は増えてしまった。

皆がそれを心配してくれる。かすみセンパイにベンケーセンパイにニンジャセンパイ……こんな自分を心配してくれてありがたいやら情けないやら。

……沙綾に心配されると自分の情けなさに怒りそうになってしまう。

「彼」に心配されると……とりあえず頬が熱くなるので、怒っているのだと思う、多分！

たえはどうにかして現状を終わりにしたかった。自分でも何を終わりにすればいいのかどうすればいいのかわからないが、とにかく終わりにしたかった。

……だから終わりにすることにした。たえその先に待つのが何であろうとも、たえは終わりにしたかったのだ。

(まずは「彼」からつす……！ ぐちやぐちやにして、ずっとずっと私の元で謝らせ続けさせてやる……！ 2度とギターが弾けないように、約束を破った罪をいつまでも忘れないように、その身体に刻んでぐちやぐちやにしてやる……!!)

全てを焼く尽くす氷のような、触れた物を凍らせる炎の様な感情がその時のたえに爆発しそうな程に渦巻いていた。

片目に宿った負の感情が、かつてもう片方の目に宿った恋の輝きを消し去らんばかりに浸食しだしていた。

何だろう、とあなたは内心で首をかしげながら歩いていた。

昨日の蔵レンの後、たえから『明日、家に来い』の一言で家に来るように誘われ——いや、あれは命令に近いか？

とにかく、たえの眼は何らかの意を決した様な強い眼をしていた。何の意思を固めたかはあなたにはわからなかったが、その思いを無下にするつもりは無かった。ちょうどその日は予定が……ないわけではなかったが、家で再練習をするだけだったので。

同時にどうしてあの快活な少女が自分を——最近では沙綾も？ 敵視した目をするのかをあなたは知りたかった。なので、あなたが絶好の機会だと捉えたのもあったが。

護衛と言っについてきたがるりみや心配そうにする香澄に沙綾、手を出さないようになどと注意する有咲をおいて、あなたは一人でたえの家に向かっていた。

LINEで送られてきたたえの家の前についていた。

あなたはその家を見て、鉄壁の城塞の様な囚人を監獄の様な冷たい印象をどうしてか受けてしまった。ごくりと無意識につばを飲み込む。

何故そんな風に思ってしまったかはわからない、これから何か起ころのだろうか。しかし、ここまで来た以上引き下がるつもりは毛頭なかった。

あなたは恐る恐る玄関にあるインターホンを押した。冷たい印象とは反する軽快なチャイムが白々しくなった。

数秒後、『……入って』という爆発しそうな何かを限界まで抑えたかのような小さな眩きと共に、ガチャリと重い様な軽いような音を立ててドアのロックが解除された。

あなたはおそろおそろドアを開けた。ドアを開けた先には俯き前髪で表情を窺うことが出来ないたえがいた。

———そういえば、とあなたは昔を思い出す。昔、ひと夏だけ一緒に遊んだ「あの子」、あの子もすねたりすると帽子の角度を変えて俯いて表情を隠していたな、と。場違いなことを考えてしまった。あの子との約束を一度破ってしまったのに、それでも自分は都合よくギターをまた聴かせてあげたいだなんて……

「ついでにっ」

たえの消え去りそうな声であなたは現実に戻された。

たえはあなたの返事を待たず、フラフラとした様なしつかりしている様な相反する感覚を受ける足取りで廊下を歩きだした。

お邪魔します、とあなたは挨拶して、たえの後を付いていった。

通されたのはたえの部屋だった。

ウサギのインテリア可愛らしく配置されている、女の子らしい部屋だった。

壁に貼り付けられているあなたの写真さえなければ。

は……？ あなたは困惑した。意味がわからない、何故自分の写真がこんなにも壁に貼り付けられている。しかも、ただ貼り付けられているものだけでなく、その中の半分ぐらいは自分の顔が塗りつぶされて至り、赤いペンで×が掛かっている。

それらを認識した数秒後、あなたの背中に冷たく流れ落ちるものがあった。まずい、とあなたは思った。ただの直感ではあったがここにははまずい、と思った。

——しかし、それは少しだけ遅かった。

ガシャン！ と音を立ててあなたに腕に何かがかけられた。

銀色に鈍く輝くそれは、刑事ドラマ等で見たことのある……現実的には初めてみる……手錠だった。

見た目ほど重くない手錠は、しかし確かな重さをあなたへと与えて来た。あなたは驚きで固まっていた。そのあなたに構わず、散歩中に動かない犬をリードで引っ張るかの如く、たえは手錠を自分の方へ引っ張った。

驚きに固まっていたあなたは踏ん張ることも出来ずに引っ張られて床へ転がった。

床とぶつかった身体が痛い、あなたが顔を起こそうとするよりも早く、たえの白くて綺麗な足があなたの右手の上に乗せられた。

「……この右手、いらないうすよね？」

言葉と共に右手が踏みつけられる。強くは無い少女の力とはいえ、無理矢理引っ張られて、逆方向へ踏みつけられればまるで手がちぎれ

てしまうかのような激痛が右手に走った。

……っは、ああつ！ とあなたは痛みに呻きながら、痛みを与える主であるたえを何とか見上げた。

たえの表情は氷の如く凍り付いてた。しかし、氷の下には噴火を待つ溶岩が煮えたぎっているようで、ふとした刺激で表面を覆う氷が割れてしまうのは明白だった。

……なんで、とあなたは無意識に呟いてしまった。以前から敵視されていたのも嫌われていたのもわかってはいた。しかし、ここまでされる謂れがわからない。

あなたの言葉にたえの氷に少しひびが入った様で、憤怒の炎が漏れ出し、表情を忌々し気に歪めた。

「あなたの事、気に食わないからつすよ」

ギリ、と右手を踏む足に力が入る。

ぐうっ……！ と痛みを打ち震えるしかあなたは出来なかった。

「……裏切者」

たえがぼそつと呟いた

「裏切者、裏切者……裏切者つ！！」

呟きは次第に大きくなり、最後には咆哮と化した。

その咆哮に、憤怒と憎悪と悲痛さが含まれているのをあなたは感じた。

……わけがわからないのは変わりない。しかし、自分はこの少女をここまで傷つけ歪めてしまう様な事をしてしまったのだ。

あなたを自分でもわかり切れない罪悪感が襲った。そんなあなたに気が付いたのか、たえは何度も繰り返し繰り返し、あなたの右手を踏みつけた。

「こんなのっ、こんなのっ……！ いらないっすよねえ!? だったら、自分が潰してやる!!」

ガシガシと右手が踏まれ続ける。

痛かった、だがそれ以上に心が痛かった。多分、許してもらえないだろうと思った。償い方すらわからない。

……それでも

やめてくれ

あなたは静かにたえに訴えた。今、この右手を失うわけにはいかない。約束を破ってしまったが、それでも――

あなたの訴えを聞いたたえの睨が憤怒のため釣りあがった。ギリギリと歯ぎしりし、右手を踏んでいる足の力が強くなる。

「よくも、そんな恥知らずな……恥知らずな事が言えるつすね!!」

ぐりぐりと右手をすりつぶしていくかのようなたえは力を入れて足を動かす。

ああ……、痛みで呻きながら諦めた様なため息をあなたは出した。

わからない、わからない……たえがどうしてそこまで怒っているのかわからない。

けれどもあなたの中でわかっていることはある。自分が昔、あの子とした約束を破ってしまったこと。だから――今度こ

そ、その約束を裏切りたくない。痛みで言葉に出来ない、それでも伝えなくては――

「あの時の！ 約束を！ 破った癖につ！ このつ、このおつ！ 自

分はずっと忘れていなかったのに！ こんな右手が残っているから……淡い希望を抱くんだっ！ 潰れろ、潰れろおおお……」

……約、束？

その言葉に反応したあなたは痛みを耐えてたえの顔を見る。

憤怒に染まる目からは涙がこぼれていた。憎悪に染まっていたはずの叫びには必死な悲痛さが窺えた。

その涙に、必死なまでの悲痛さに、あなたは見覚えがあった。

数年前のあの夏の日……別れる事になり、再開の約束をした少年。いや、少年だと思い込んでた人物。

その顔が……重なった。その瞬間、あなたはたえの怒りも悲しみも何もかもを理解した、気がした。

ならば、これは当然の罪だと、罰だと思う。

……だから、言葉を紡ごう。それがあなたが少女に出来る唯一の事であり、それ以外はしてはならないのだから。

約束を破つてごめん。

あなたが言葉を発したとき、ぴくりとたえは揺らいだ。

沙綾の事も知ってるんだよね？ そう尋ねたあなただだったがたえから返事は無かった。ただじつとぐちゃぐちゃに歪んだ感情の表情であなたを見ている。

あなたは話した。たえと約束して別れてからの事、香澄に起きた事、バンドの事、沙綾の事、そして今の自分の事。

沙綾がポピパに加入したその日、あなたと沙綾は和解をした。そして、あなたは再びギターを手に持った。今度こそ、あの夏の子との約束を破らないために。

あなたが言葉を紡ぐたび、たえの身体は震え、涙の粒は大きくなって。色々な感情が混じり合った瞳からは彼女の思いを察することが出来ない。

あなたは一通り話をした。たえの動きは止まり、数秒とも数十秒とも数分間とも数時間ともわからない沈黙が部屋を包んでいた。

「……今更」

ぼそりとたえが呟いた。

「今更、そんな都合のいい……」

たえの声も身体も震えていた。

「そんな事、許せるわけがない……！」

たえは右足を大きく上げた。恐らくあなたの右手を砕く為だろう。あなたは目を瞑り、静かにその時を待った。

……

「……今更」

(覚えていてくれた、嬉しい)

「今更、そんな都合のいい……」

(ふざけるな、約束を勝手に破っておいて)

「そんな事、許せるわけがない……!」

(碎いてしまえ!
もうやめよう?)

右足を大きく振り上げる。どうしたいのか自分でもわからなくなってしまうた。

勝手に約束を破って置いて、もう一度約束を守ろうなんて都合の良過ぎる。

ギターを再開する理由が、何よりも約束のためなんて嬉しい。

こんな事を始めてからそんなことを言い出すなんてズルい。

“彼”の事を正直に話してくれて笑みがこぼれそう。

(わからない、わからない、わからない……自分はどうすれば……)

ぐるぐるグルグルと嬉しさと怒りの相反する感情がたえの中で渦巻く。

ここで右手を潰したら今度こそ“彼”のギターを聴け無くなってしまうのではないか?

約束を破ったのは“彼”だ、ギターなんて二度と弾かせてやるものか。

ぐるぐるグルグルぐるぐるグルグルぐるぐるグルグルぐるぐるグルグルぐるぐるグルグルぐるぐるグルグルぐるぐるグルグル……

(あ、あああああああああああつつつつつつ!!!)

どうしていいかわからなくなつたたえは内心で悲痛な叫びを上げながらも、表情には一切出さず、大きく足を振り下ろした――

あなたはたえのベッドに腰掛けて、右手の動きを確かめていた。たえがあなたに抱き着いて腰に顔をうずめて体を震わせて泣いている。

あなたは左手でたえの頭を優しく撫でた。言葉は出なかった、何を

言っているのかあなたにはわからなかった。

涙でかすれた声でたえが言葉を紡ぐ。

「もう、どこにもいかないで欲しいっす……あの時みたいに手を振って別れたくないよお……」

ひぐひつぐとたえは泣きながらも自分の思いを吐露する。

彼女をここまで追い詰めた自分が傍にいていいのか、とあなたは思う。今すぐ消えた方がいいのではないかも。

しかし、それはあなたにとって都合のいい免罪符かもしれない。いや、ここまで彼女を傷つけたのにまだ傍にいる方が免罪符なのだろうか。あなたにはわからなかった。

それでも、あなたは傍にいたいと思ってしまった。自分が傷つけてしまった彼女を支えたいと思ってしまった。許されることではないはずなのに。

たえの傍にいたい、たえが望んでくれるなら

あなたの言葉にたえは少し力を入れて腰を掴んだ。

たえの身体の震えも心なしか大きくなっていった。

「絶対、絶対に今度こそ、約束を破らないで……」

ああ、とあなたはそういつて頷いた。

今度こそ、今度こそ……彼女との約束を破らないようにしようとあなたは胸に刻んだ。

信用されると思っていいのか？と、たえの部屋に貼られている×印を付けられた自分の写真が吐き捨てた気がした。

彼女をちゃんと支えてあげるんだよ？と、たえの部屋に払っている×印を付けられていない自分の写真が諭した気がした。

あなたは右手にかけられた銀の手錠の先を見た、手錠の片方はたえの左手にかけられて繋がれていた。

銀の鎖は固く結ばれて引きちぎることは出来ない。罪と罰の証は部屋の光を冷たく反射していた。

香澄ちゃんがこちらを気にかけてくれる度、嬉しかった／苛々した。

香澄ちゃんが私を置いていくと言った時、撃ち抜かれた気がした／踏みにじってやりたかった。

香澄ちゃんが蔵へやってきた私に笑顔を見た時、星の輝きを見た気がした／泥を見下ろした気分になった。

何でそんな事を思うのだろうか？ 自分でもわからなかった。けど、ようやくわかった気がする。

これは「嫉妬」だ。一度は折れたはずなのに、それでも再起した戸山香澄に。違う……もっと正しくいうのならば「彼」がずっとそばに寄り添っていてそれでも再起した戸山香澄に私は嫉妬していたのだ。

そして……「彼」への思いもぐちゃぐちゃになって分からなくなった。

香澄ちゃんを支えていた事を嬉しく思う反面、どうして私の時はあなつてしまったのかと憎々しげに思う。

優しい気に香澄ちゃんや皆を見る「彼」の表情が好き、けどどうしても私以外もあんな目で見えるのか。

「彼」を含めた皆と一緒に過ごすのが楽しい、でも怖い……怖い？

その事に気が付いたある時、背中に氷柱を入れられたかのように背筋が凍り付いた。

怖くて怖くてどうしようもなかった。

「彼」が……取られてしまうんじゃないかという恐怖。

中学校の時に知り合ってから短いけど長い間一緒に過ごしていた。でも香澄ちゃんはそれ以上に長い付き合いがある。

皆と一緒にいるときの「彼」は楽しそう。私は手を上げることしか最近はしてない……

だれがどうみても明らかだろう、楽しい時と一緒に過ごす幼馴染たちとその仲間、自分の癩癩から暴力を振るう元バンドメンバー……

「彼」にとってもどちらという方がいいのか、考えずとも分かって

だ。

沙綾が更に力を入れるべく、態勢を変えた。その時、沙綾は何かに気が付き、嗤い声を止めて首を絞める手の力を緩めた。

「がはっ！」と「彼」は呻いた。今まで足りなかった酸素を取り入れるかのように苦し気に呼吸を繰り返す。

急にどうしたのだろうか？ と自身の首を絞められたことを気にせず心配そうに沙綾を見た。「彼」に馬乗りをしている沙綾は愉快そうな蔑むような、そんな表情で「彼」を見下ろしていた。

「ふ、ふふふつ……最低っ！」

愉しそうに侮蔑の言葉を沙綾は吐き捨てる。

「彼」は何のことやらわからないというように首をかしげた。

その様子を見た沙綾は可笑しそうにクスクスと嗤う。

「ごっ、滾ってるよ……？」

!! と「彼」の表情が驚愕と羞恥に染まる。

沙綾は妖しく嗜虐的な笑みを浮かべながら「彼」の身体のある一部を触っていた。

死にそうになった時の反応だから仕方ない……とは口が裂けても

「彼」は言えなかった。

「あははははっ!! 女の子の首絞められて何考えてたのかなー？」

ニヤニヤと鬨るように沙綾は笑う。そんな沙綾に「彼」は何も言えなかった。ただ目をギョツとつぶるだけである。

反応しない「彼」につまらなそうに唇をわざとらしく尖らす沙綾だったが、何かを思いついたようでパツと表情を切り替えた。

「そうだ！ ねえねえ私の言う事なんでも聞いてくれるんでしょ？」

（駄目、そんなこと止めて！ お願い、止まって！）

「私を……抱いて？」

（やだ……やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだ!! 違う、そうじゃないの!! そんなことして……彼を傷つけたくない!!）

沙綾の発言にさしもの「彼」も目を見開いた。

そんな事出来るはずもない、自分が傷つけられるのは我慢できる。

“彼”は力を振り絞り沙綾を抱き寄せると唇を重ね合わせた。あまりにも“彼”らしからぬ強引な行動に不意を突かれた沙綾は驚きに目を見開かせながら“彼”と唇を重ね合わせる。

数秒、唇を重ね合わせていた2人だったが、やがてどちらともなく離れていった。沙綾は相変わらず笑みを浮かべていたが、先ほどまでの嗜虐的な愉悦の笑みとは違い、暖かで嬉しそうでそれでいてどこか寂しさを感じさせる複雑な笑みを浮かべていた。

数秒そうして見つめ合っていた2人だったが、やがて沙綾は“彼”から退くと、“彼”に手を伸ばした。助けを求めるかのように、地獄への道連れを作るかのように。

「来て……」

(ああ、最初からこうすればよかったのかな……?)

【そうだよ、最初からこうしてればよかったんだよ!】

“彼”は湖水の様に落ち着いた瞳で沙綾の手を取った。起き上がった“彼”は沙綾を優しく抱きとめると、彼女をベッドの上に大切な宝石を扱うかのようにゆっくりと丁寧に押し倒した。

あの夜の日以降、“彼”はポピパの蔵レンに顔を出さなくなった。責任の取り方なんてわからないけど、と“彼”は言っていた。“彼”なりのけじめだったのだろう。

事情を知らないポピパの皆は心配していたが、それでも香澄ちゃんだけは「彼なら大丈夫だよ」と私に先に行っちゃう、と言った時と同じ表情をしながら皆に言っていた。

幼馴染で付き合いの長い香澄ちゃんだからこそ、“彼”が何をしていようとどこへ行くこうと信じているのだろう。

……ああ、香澄ちゃんが羨ましい。どろり、とした感情が私の中に湧き出る。私はいつだって不安と後悔ばかりなのに、“彼”を傷つけ

てそれでも「彼」を求める浅ましいのに、香澄ちゃんはいつだって星の様に輝いている。

……部屋の一人でいるともう一人の私が頻繁に顔をのぞかせる。泥の様な女、悍ましい感情を伴う私。

「ふ、ふふふ……」

……ああ、私はなんて醜い女なんだろう。泥の様な私を見て思う。

それでも、「彼」は私を選んでくれた。傷つけて、踏みにじって、殺しかけて、脅したのに、それでも私を選んでくれた。そのことに優越感の笑いが込み上げてしまう。

星の輝きが何だ？泥の中に引きずり込んでしまえばいい。欲しいものはどんな手を使っても逃がさない。他人に渡すなんてありえない。「彼」を放っていた彼女たちが間抜けなだけ。

どろどろとした感情がお腹の中で渦巻く。ポピパの面々に「彼」が誰のものになったのか思い知らせてやりたいという思いが噴火しそうになる。

「く、くふふ……あはは……」

ああ、もうだめだ。携帯を取り出してあの日の夜の写真を皆に送ろうとした、築くことの出来た関係が崩壊しようとするその時

沙綾、来たよ。

とんとんという軽快なノックと共に「彼」が部屋の中にいる私に声をかけた。

「彼」が来た！それだけで、先ほどまで私の中にあつたどろどろした感情は一瞬で消え去った。まるで陽だまりの中にいるかのような暖かみが私の全身を包んでいた。

「今開けるから、ちよっと待っててね！」

携帯を放り出して部屋の鍵を開ける。そこにはやはり「彼」が優しい表情をして立っていた。

たまらなくなった私は彼に飛びつく様に抱き着いた。ああ、暖かい。私の暗い部分を癒してくれる。

私の中に生まれたもう一人の私。どろどろして浅ましくて醜い私

は消え去ることは無いのだろう。それでも、「彼」が傍に居るのなら私は大丈夫だ。

だから……私から離れないでね。ずっと私のそばにいてね。この暖かみがあればやがて泥も消えずとも乾いていくから。

「彼」の胸に頭を預ける。……ああ、私は幸せだ。

この時、お互いを確かめるかのように抱き合う彼らは知らなかった。

あの夜の日、身体を求めあったあの日、沙綾に新しい命が宿っていたことを。

数か月後、そのことで一混乱あるのだが……それはまた別のお話。